四條畷市埋蔵文化財包蔵地調査概報10

日本住宅公団 田原団地建設予定地内

田原城址・田原遺跡
発掘調査概要・Ⅱ

— 四條畷市大字下田原・上田原 —

1981・3

四條畷市教育委員会

四條畷市埋蔵文化財包蔵地調査概報10

日本住宅公団 田原団地建設予定地内

田原城址・田原遺跡
発掘調査概要・Ⅱ

— 四條畷市大字下田原・上田原 —

1981・3

四條畷市教育委員会

はしがき

四條畷市田原地域にかゝる日本住宅公団の住宅団地建設計画にもとずき、開発に先行する埋蔵文化財調査は、昨年度に引続き昭和55年度も市教委に委託され、こゝにその調査を終了し概要を報告すること、なった。今回の調査は、団地計画地域の南東部にかゝる田原城址の範囲確認調査と、団地計画地域北部の戎川右岸の現在住宅地に隣接する丘稜地の調査であった。

室町時代の終り頃、四国から出た三好長慶はその居城を飯盛山にもとめ、一時期その勢を近畿一円にふるったのであったが、田原城はこの飯盛城の支城として歴史上に出てくる城であった。安土城や大坂城の築城以前に構えられた城としてこの田原城は、自然の地形をたくみに利用し、本丸、二の丸、あるいはかくし井戸等城としての予想される構えをもった小さな山城であった。「城の下」「門口」「矢の石」等城郭に関連ある地名が今に伝えられ、それと共に城主は田原対馬守であったと云われている。

今回の調査では、地形、遺物等からみて、今まで予想されていたものより広い範囲で城の構えがあったものと確認せられた。また戎川右岸丘稜では中世から近世にかけての遺物が検出され、この時期の状況が明らかとなった。

調査に当っては、日本住宅公団、大阪府教育委員会をはじめ多くの方々のご指導ご協力をいただき無事に調査を終了することができ、改めて関係各位に深甚なる謝意を表するものである。

四條畷市教育委員会

教育長　櫻　井　敬　夫

例　　言

1．本書は、四條畷市教育委員会が、昭和55年度に日本住宅公団田原団地建設工事に先立ち、日本住宅公団関西支社より委託を受けて実施した四條畷市大字上田原７９１番地他に所在する田原城址・田原遺跡発掘調査の概要報告書である。

2．調査は、昭和55年10月１日に着手し、昭和56年３月31日まで発掘調査を行ない昭和55年度調査事業を終了した。

3．発掘調査は、教育委員会社会教育課技師・野島　稔を担当者とし、調査補助員として森本澄一、松田裕伸があたった。

　出土遺物の整理・実測などについては、野島　稔、森本澄一、松田裕伸、阪本冨美子、川本三智子、永井蓉子、一色ルリ子、島田恵子、井上智子、山口文代、樋口博子、植田真紀、松岡俊江があたった。

4．本書の執筆は、野島　稔が行なった。

5．発掘調査の進行・報告書作成などについては、同志社大学・瀬川芳則、大東高校・山口　博、グアム大学・片岡　修、大阪府教育委員会・井藤　徹、堀江門也、財団法人枚方市文化財研究調査会・宇治田和生、三宅俊隆、桑原武志、畷古文化研究保存会の諸氏、諸機関から種々の御教示をうけた。明記して感謝の意を表したい。

6．発掘調査の進行については、日本住宅公団関西支社、田原宅地開発事務所四條畷市田原開発促進協議会、下田原区長・中尾雅雄、上田原区長・寺井正夫の諸氏には終始懇切なご協力をうけることができた。記して厚く感謝の意を表したい。又、調査作業については、株式会社フジタ工業、青野組奥野重機の全面的な協力を得た。

本 文 目 次

はしがき

例　　言

Ⅰ　調査に至る経過 …… 1

Ⅱ　遺跡の位置と歴史的環境 …… 2

Ⅲ　田原城研究史 …… 5

Ⅳ　調査概要報告 …… 8

田原城址 …… 8

田原遺跡第３次発掘調査 …… 19

Ⅴ　まとめ …… 29

挿　入　目　次

第１図　田原遺跡周辺地形遺跡分布図
第２図　田原城址平面図
第３図　第３次調査位置図
第４図　田原城南濠調査地位置図
第５図　田原城北濠調査地位置図
第６図　田原城濠内トレンチ断面実測図
第７図　田原遺跡調査地位置図
第８図　田原遺跡第３次調査トレンチ断面実測図Ⅰ
第９図　田原遺跡第３次調査トレンチ断面実測図Ⅱ

図　版　目　次

図版１　遺跡周辺の航空写真
図版２　田原城址遠景
図版３　田原城址遠景
図版４　田原城址及び古堤街道・矢の石
図版５　田原城南濠内第２トレンチ・第３トレンチ
図版６　田原城南濠内第３トレンチ
図版７　田原城北濠近景
図版８　田原城北濠内第４トレンチ
図版９　田原城北濠内第５トレンチ
図版10　田原城北濠内第６トレンチ
図版11　田原城北濠内第７トレンチ
図版12　田原城第８トレンチ
図版13　田原遺跡調査地全景・第６トレンチ全景
図版14　第６トレンチ
図版15　第８トレンチ全景
図版16　第９トレンチ全景・北壁断面
図版17　第11～第18トレンチ調査地全景
図版18　第12・第13トレンチ全景
図版19　第13トレンチ南壁断面・炭化物出土状況
図版20　遺物写真・土器Ⅰ
図版21　遺物写真・土器Ⅱ
図版22　遺物写真・土器Ⅲ
図版23　遺物写真・土器Ⅳ
図版24　遺物写真・土器Ⅴ・石器Ⅰ
図版25　遺物写真・土器Ⅵ
図版26　遺物写真・土器Ⅶ

田原城址・田原遺跡発掘調査概要・Ⅱ

Ⅰ　調査に至る経過

昭和50年度に大阪府教育委員会が田原団地建設予定地内の遺跡パトロールを実施され、又、昭和52年度に四條畷市教育委員会が日本住宅公団関西支社からの依頼により建設予定地内の遺跡パトロールをそれぞれ実施した。

その結果、国道163号線と市道辰巳谷線の交叉する西側の丘陵に花崗岩で築かれた横穴式石室1基を確認することができた。この丘陵は標高173ｍから3本に、東向きに派生する北端の丘陵中央部に位置している。未発掘のため出土遺物は不明であるが築造時期は6世紀後半頃と考えられる。もしこれが古墳とすれば今後この周辺の丘陵上に数多くの横穴式石室が検出される可能性がある。

次にこの古墳の東の眼下に流れる戎川と辰巳谷線の交叉する所に角堂橋と呼ばれる橋の周辺に瓦器椀、土師質皿、布目平瓦が数多く表面採集することが出来た。この橋の名にも出ている角堂は中世の堂があるのではないかと思われる。この場所は現在水田になっているが約50～60ｍ四方の水田から上記の土器片が採集することができた。

山の中腹には、花崗岩が露出している巨石群が2ヶ所に見ることができる。又、この巨石群の周辺には花崗岩の石垣が築かれている。この石垣は地元で近世に切り石の残石で石垣を築いたと云われている。

建設予定地の南端の字八ノ坪には田原城址が地元の協力により保存されている。

この田原城址については第Ⅲ章の田原城研究史について詳しく述べることにしたい。最後に建設予定地内全域に約50基以上の炭焼き窯を見ることが出来た。

大阪府教育委員会及び、四條畷市教育委員会が発見した土器散布地を日本住宅公団作成の地図上に印を行ない、この資料をもとに日本住宅公団・大阪府教育委員会・四條畷市教育委員会の三者によって協議を行なった。この結果、昭和53年度に第一次発掘調査をこの土器散布地を中心に遺跡の確認及び遺構の保存状態を目的に四條畷市教育委員会が調査を実施した。

昭和54年度には第2次発掘調査として田原団地建設に係る戎川改修工事予定地内の調査を中心に実施したものであり、今回の昭和55年度第3次発掘調査は、団地計画地域の南東部にかかる田原城址の範囲確認調査と、団地計画地域北部の戎川右岸と既成集落に隣接する丘陵地の遺跡の確認及び遺構の保存状態を目的に四條畷市教育委員会が調査を実施した。

Ⅱ　遺跡の位置と歴史的環境

四條畷市は大阪府の北東部に位置し、奈良県の県境にある。田原は四方を山に囲まれた盆地として夏は四條畷市内より約1度～2度気温が低く住みよい場所である。

田原盆地の中央を北流する天野川が大阪府と奈良県の境になっている。

大阪府側は四條畷市大字上田原・大字下田原，奈良県側は生駒市大字北田原・大字南田原と呼ばれる地名である。

四條畷市大字上田原・下田原は、生駒山系東北部の山裾に位置し、北端には大阪から奈良への主要幹線道路の国道163号線と地区外南部の阪奈道路にはさまれた南北約2キロメートル、東西0.8キロメートル、開発面積約125ヘクタールの区域の開発である。

田原団地建設予定地と東側に北流する天野川との間には、上田原及び下田原の既成集落があり、現在人口約1,400人の小規模な集落である。田原団地建設によって日本住宅公団の人口計画では3,900戸約15,000人の人口がこの団地に住む予定になっている。

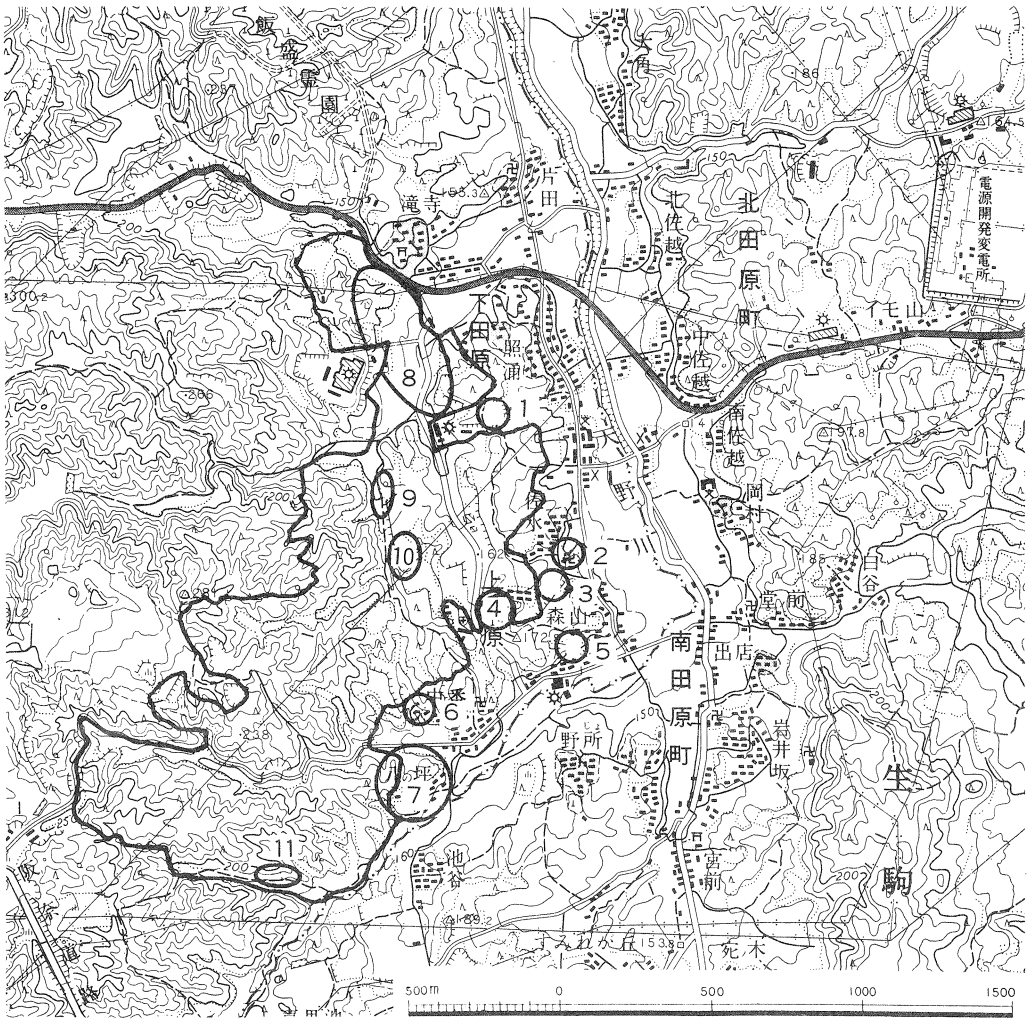
本地区の地質は、東部が沖積層粘土及び砂礫質で西部の丘陵地は花崗岩及び大阪層群からなっている。

田原地区に係る文化財としては昭和54年度(第2次発掘調査)に団地建設に係る戎川改修と市道辰巳谷線の路線変更地の調査において縄文時代に属する土器・石器ならびに石組の遺構が検出された。遺物の包含地は南北43m、東西13mの水田地2枚分の範囲にわたっており、表土下約1mの赤褐色でやや粘土まじりの砂質土層から近畿でも数少ない早期に属するもので北河内地方の早期縄文遺跡である神宮寺遺跡に次ぐ遺跡である。

出土した遺物は山形押型文、楕円押型文、貝殻条痕文、過擦文の縄文式土器とともに石鏃、石ヒ、石錐、大型掻器、掻器、剝片石器、小型尖頭器、ハンマーストーンの 石器が伴出している。又、市道辰巳谷線と戎川との交叉する角堂橋の西120mの生駒山系東傾斜面山裾の標高T.P.144.0mの水田地の全面発掘において、東西2.25m、南北2.45m、深さ40cmの土壙状遺構が検出し、遺構内堆積土層の褐色砂質土から土師質小皿、羽釜が出土した。土器形成からみて、また瓦器椀が共伴しないことから15世紀前半の遺構である。土壙状遺構の南において耕土下3.64mの深さの落ち込み状遺構が検出した。堆積土層は15層に細分され各層内からまとまった土器類が出土している。最下層から出土した須恵器口縁部や羽釜からみて12世紀中頃～終り頃とし、堆積土層上面からの瓦器椀、羽釜の出土から13世紀に落ち込み状遺構が完全に堆積したと思われる。

又、周辺では田原住吉神社境内の石槽があげられる。この石槽は花崗岩の巨石を加工した長さ約2m・幅約1m・高さ約0.7mのもので四日市街道工事中、天野川畔から出土しこの地に運ばれたものであり、この石槽と同型のものが大阪四天王寺に現存している。住

吉神社境内石槽は昭和48年３月30日に大阪府文化財考古資料第７号として指定されている。又、同境内西側に十三仏がある。十三仏とは死んだ人の初七日から三十三回忌までの十三回の供養する仏達を１枚の板石に刻んだもので、鎌倉末期から十三仏が始まるといわれている。この十三仏は永禄８年（1565）のもので田原地区には照涌野田墓地内十三仏とあわせて２基が現存する。四條畷市内には中野正法寺・中野共同墓地・南野弥勒寺等合わせて



第１図　田原遺跡周辺地形遺跡分布図

1．照涌野田墓地（両墓制）・十三仏
2．正伝寺薬師如来
3．森福寺跡
4．森山墓地（両墓制）
5．住吉神社境内石槽・十三仏
6．月泉寺墓地五輪塔
7．田原城址
8．田原遺跡（縄文早期・古墳・鎌倉時代）
9．巨石群
10．石垣遺構
11．石組遺構

7基が知られている。

次に上田原正伝寺別棟堂宇に高さ2mの薬師如来が安置されている。この仏像の胸のふくらみ、全体感、衣紋の滑らかさから見て鎌倉時代初期のものとみている。

この薬師如来は、もと「森福寺と号する上田原所在の真言宗寺院境内」にあったことが、天保15年（1844）明細帳に見られ、天文2年（1534）付の「神道秘事書」の古文書からみて戦国期の寺院であった森福寺の薬師如来であったことが明らかである。現在は森福寺は廃寺となっている。又、正伝寺には両墓制がある。死者を葬った場所に墓碑を建て、そこを永久に祭りの場とするのを単墓制と呼ぶのに対し、比較的短期間祭りをしただけで近寄ることもせず、祭りをするための墓地を別の離れた場所に設けるのを両墓制と呼んでいる。一般に知られている墓地は単墓制である。

両墓制を残す所は全国で約70ヶ所報告されている。大阪では、富田林市、豊能郡田尻、枚方市津田の3ヶ所が数えられているのに対し、当市田原地区には、下田原5ヶ所、上田原に4ヶ所の墓地があって、月泉寺の五輪塔、卵塔墓地以外はすべて両墓制である。

次に田原城は上田原八の坪に所在する標高178.6mの生駒の第1の山脈の西側に突出した部分をたくみに利用したもので、現在はこの城に関する文献資料はほとんど見当らないが、城郭に関連する地名が残されている。その地名と大小字名で「城の下」「門口」「土居の内」「的場」「矢の石」が地元で呼ばれている。

また頂上部の本丸跡にあたるところに現在住吉大神を分祀している館がある。本丸跡は南北約26m、東西約7mの削平地で本丸跡から田原盆地を一望のもとに見おろすことができる。又、北は眼下に古堤街道で、周囲は谷と川でめぐらし平地との比高差は約30m高くなっている。本丸跡の南側に「切り堀り」があり「井戸ヶ谷」へと続く「隠し井戸」と呼ばれる井戸があり、非常用の水利と考えられる。「切り堀り」より西側の畑地「二の丸」としての性格をもち、当時の居館のあったところと推定されている。又、西南隅に突出した丘陵が「西砦」と考えられる。

田原城は田原対馬守を城主としたもので戦国時代の終り頃に近畿の覇をとなえた三好長慶の麾下にあった飯盛城の支城としての機能をはたし、やがて織田信長の統一によって消滅していったものと思われる。

Ⅲ　田原城研究史

四條畷市田原地区について記された公刊文書は、平安末期の保延5年（1139）、久安元年（1146）の小松寺縁起奉加帳に「田原西郷・田原東郷」と記されるのが最初である。

田原郷は大和国と河内国に両分されていたかの如くに考えられる。江戸期の河内志には、上田原・下田原を河内国の項に説明し、南田原・北田原については「倶に今は和州添下郡に属す」と記して、昔時は南・北田原も含め河内に属したかのような書き方をしている。併し、当田原が国・郡制の大化改新期より河内・大和の何れに所属したかの史料は全く欠除しており何れとも断定し難い。

又、元禄2年2月11日に天野川沿いに、交野・岩舟より田原に旅して著名な記行文を残した儒者貝原益軒は、60才の南遊紀行文の中に、「岩舟より入て、おくの谷中七八町東に行ば、谷の内頗広し。其中に天川ながる。其里を田原と云。川の東を東田原と云、大和国也。川の西を西田原と云、河内国也。一澗の中にて両国にわかれ、川を境とし名を同くす。此谷水南より北にながれ、又西に転じて、岩舟に出、ひきゝ所に流れ、天川となる。凡田原と云所、此外に多し。宇治の南にも、奈良の東にもあり、皆山間の幽谷の中なる里なり。此田原も其入口は岩舟のせばき山澗を過て、其おくは頗ひろき谷也。恰陶淵明が桃花源記にかけるがごとし。是より大和歌姫の方に近し」。と記行されている。

郷土史家平尾兵吾氏が昭和6年に「北河内郡史蹟史話」を出版された。その中の田原城址の項に以下の通り記述されている。

田原村大字上田原字八ノ坪にある。附近よりの高さ約50mの丘陵上にあって、西は生駒清瀧の山に続き、東方田原盆地に望んで、南北は自然の河谷を控え頗る景勝の地形である。南側の山腹とか山上には楷段状に平地が断続して居る、多分往時城廓の建物のあった址と思われるが、今は畑とか宅地とかになってしまって、当年の雄圖も壮観も見る由もない。頂上には今小さな住吉の神祠が建てられてある、現今城の上、城の下、門口、土居の内、的場、矢の石などの古い地名が名所に残されている。

口碑の伝える所によると、往昔此地の名族に田原対馬守というのがあった。城砦をこゝに構え八の坪を根拠に南北田原を領して居った。今日田原村月泉寺と称する禅宗尼寺に保管する過去帳には、延元丙子の記年ある義俊院殿節山良忠居士以下享禄天文に至る拾数名の法名がのせられてある、此月泉寺は元来水本村寝屋にあった月泉寺を移し、千光寺の名を廃したもので、もとは真言宗で千光寺と称し、城主たりし義俊院殿の開基で且其菩提寺であったといって居る、足利氏末期の享禄天文の頃には三好氏が飯盛を根拠として、威を近畿にふるった頃で、田原氏は三好に属し、飯盛背面の防備に当ったと見られる。但し築造は此以前のものか或は三好当時に補修したか新に築いたか、総て分明でないのは遺憾至

極である。

尚、前記延元丙子三月五日の義俊院殿節山良忠居士であるが、延元丙子は延元元年で五月廿五日は恰も大楠公が湊川で戦死の日、義俊、節山、良忠の文字などについて考えても、勤王烈士の英霊を吊したものであるまいか、最近甲可村逢阪から出た延元元年の文字がある五輪塔婆と併せて考慮すべきものである。

田原城に残る城郭地名

標高 175 m、南北 90 m、東西100 mの範囲に広がる田原城は、東に田原盆地を一望のもとに見おろし、北は眼下に走る古堤街道をおさえ、周囲を約3 m幅の山水河流が囲繞して自然の濠を構成する。田原城自体が生駒の第一の山脈の西側に突出した部分でたくみに地形を利用した中世の城である。

残念ながら現在は、この城に関する文献史料はほとんど見当らないが、「城下、門口、井戸谷、矢の石、土居の内、的場」等の城郭に関連する地名が残され、近くの古老は佐水の「古城」、そして聚落を垣内と呼び「出垣内・入垣内」今なお使用する人がいる。

土居の内は、八の坪の別称「土居の内」とは中世居住の聚落の周囲を防禦のためにめぐらす土畳をいい、土豪の屋敷、堀内と同じであってこの田原城は周囲を谷と川でめぐらしたものである。

一の門は田原盆地に望む東側にあり、すなわち東を正面とする田原城であった。一の門から小道を曲折しながら二の門を通り、なおも約40m程すすむと本丸を頭上にして二分している。この二分する場所が地元の古老は三の門と言われている。本丸と二の丸とは同一丘陵であったが、この築城の際に切り掘りを行ない本丸と二の丸とを区画されたものである。本丸は26m×7mの削平地に開けている。

本丸の西側に位置する二の丸の規模は東11m×24m、西22m×18mである。本丸の東側下に37m×7mの削平地があり、郭を築かれ防備を固めている。

切り掘りの西側には隠井戸と呼ばれる掘り井戸が二個並び、10m程離れて山水貯水池が存在する。

砦については、山口博氏が四條畷市史第1巻において「西砦」と呼ばれている所は、四囲が深い絶壁に廻らされ、天然の要塞をなしており、又、裏山砦は前面が2m余の急崖にのぞみ、20m×10mの郭を形づくって裏山づたいの防禦陣地を構成したと考えられている。今回の田原城の範囲確認調査において、西砦と西側に突出する丘陵との間の深い水田地において濠を確認することが出来た。又、北側の尾根においての調査でも濠の一部を確認し、この濠を結ぶ範囲が田原城の城郭である。

田原城主・田原対馬守

田原城主が誰であるのか、又、田原城をめぐる合戦が行なわれたかについては、明らか

ではないが、史料的にみて、城主田原対馬守の菩提寺の月泉寺の位牌の中に延元丙子(1336)三月五日、義俊院殿節山良忠居士。延文丙申四年（1359）十二月十日藤寿院雄山良意居士～等が残存する。月泉寺墓地に三基の五輪塔と卵塔が立ち並び、三基の五輪塔の台石は五輪塔の基部たる地輪を敷き詰めたものであり、この墓地域内には五輪塔が100基以上が林立したものであろう。

領主は、当初南朝に属し、のち北朝に転じ戦国期には畿内に君臨した三好長慶の家臣として、飯盛城の出城の役目を担ったと考えられる。

三好長慶が飯盛城に拠ったのが永禄三年（1560）十一月十三日、三好の家臣となって大和をも睨んだ田原対馬守は、織田信長の畿内制覇の中、飯盛城の陥落・廃城と共に姿を消したのだろう。

Ⅳ　調査概要報告

田原城址

田原城址は第Ⅲ章でくわしく述べたように、生駒の第１の山脈の西側に突出した部分をたくみに地形を利用した中世の城である。

田原城は地元の協力により、本丸・二の丸・裏山郭・西砦が完全に保存されていたが、今回田原城の西側一帯において日本住宅公団田原団地建設予定内にかかるため田原城の遺構有無の確認、遺構の保存状態を含めた範囲確認調査を人力において実施した。

今回の調査地は、山口　博氏が四條畷市史第１巻の田原城の構造図に示されている西砦(15ｍ×12ｍ)の西側の谷間の水田第１地区に３本のトレンチを設定し、また北側の古堤街道側の谷間の水田（第２地区）に４本のトレンチと田原城構造図の裏山郭の北側に１本のトレンチを設定した。

第１地区の水田は、５枚の棚田式の水田地であり、水田地の標高は、T.Ｐ161.0ｍを計り、西砦との比高差は10ｍ強である。

第１トレンチは、５枚の棚田式の水田地の最も低い所に位置する、大字上田原919番地に幅1.5ｍ、長さ12ｍの東西方向にトレンチを設定した。

層序は、第１層・耕土、第Ⅱ層・床土、第Ⅲ層は厚さ約25㎝の茶褐色砂層、第Ⅳ層は厚さ約50㎝の青灰色粘土層が堆積し、第Ⅴ層は厚さ約20㎝の青灰色砂層、第Ⅵ層は厚さ約40～50㎝の暗褐色粘土層、第Ⅶ層は厚さ約40～50㎝暗褐色砂層、第Ⅷ層は厚さ約40㎝の黒褐色粘土層が堆積し地山となる。地山は西から東にかけてゆるやかに傾斜している。

第Ⅲ層内から陶磁器、土師質小皿、瓦質土器がそれぞれ出土している。

第２トレンチは棚田式の下から４枚目畑地の大字上田原921番地に幅1.2ｍ、長さ９ｍの南北方向にトレンチを設定した。水田面の標高は、T.Ｐ160.50ｍ、層序は第Ⅲ層厚さ約40～60㎝の黒褐色砂層、第Ⅳ層厚さ約30㎝の青灰色砂層、第Ⅴ層厚さ約30㎝の青灰色砂層(小礫混り)第Ⅵ層厚さ約10㎝の青灰色粘土、第Ⅶ層厚さ約45㎝の青灰色砂層が堆積し地山となる。次に各層序からの出土遺物としては、第Ⅲ層内から陶器、練鉢、土師小皿、瓦、羽釜、第Ⅳ層から磁器、土師小皿、須恵器がそれぞれ出土している。

第３トレンチは、第２トレンチの南側の水田地に幅３ｍ、長さ12ｍの南北方向にトレンチを設定した。水田面の標高は、T.Ｐ159.0ｍ、層序は第Ⅲ層厚さ約18㎝の黒褐色粘土層、第Ⅳ層厚さ約30㎝の褐色砂質土層、第Ⅴ層厚さ約30㎝の青灰色砂層、第Ⅵ層厚さ約20～40㎝の青灰色粘土層、第Ⅶ層厚さ約70㎝の青灰色砂層、第Ⅷ層厚さ約50～70㎝の黒褐色粘土層が堆積し地山となる。

各層序からの出土遺物としては、第Ⅲ層内から土師質小皿、土師質大皿、陶器、羽釜、

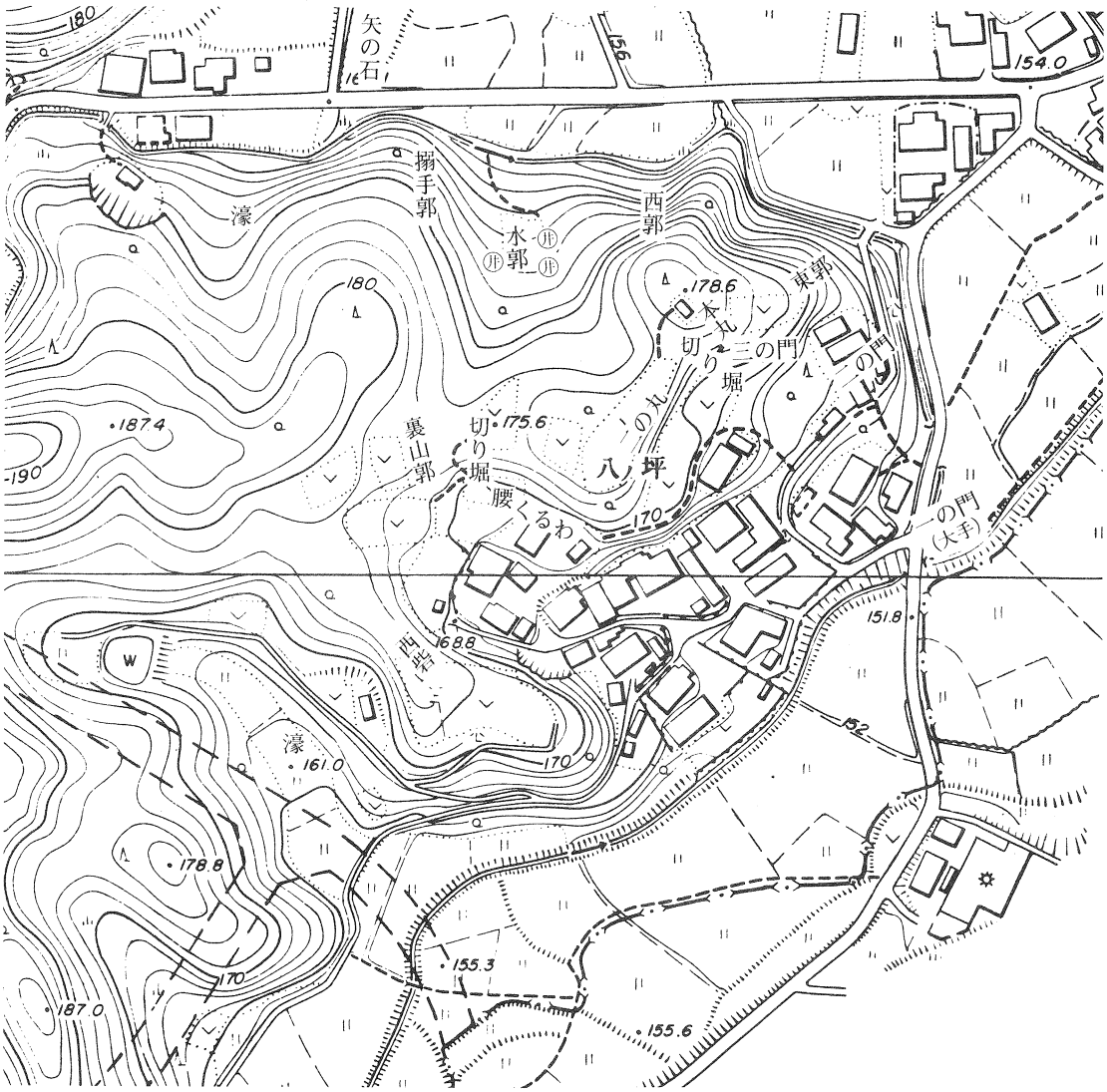
おろし皿、くらわんか茶碗、第Ⅵ層内から土師質小皿が出土している。

第2地区

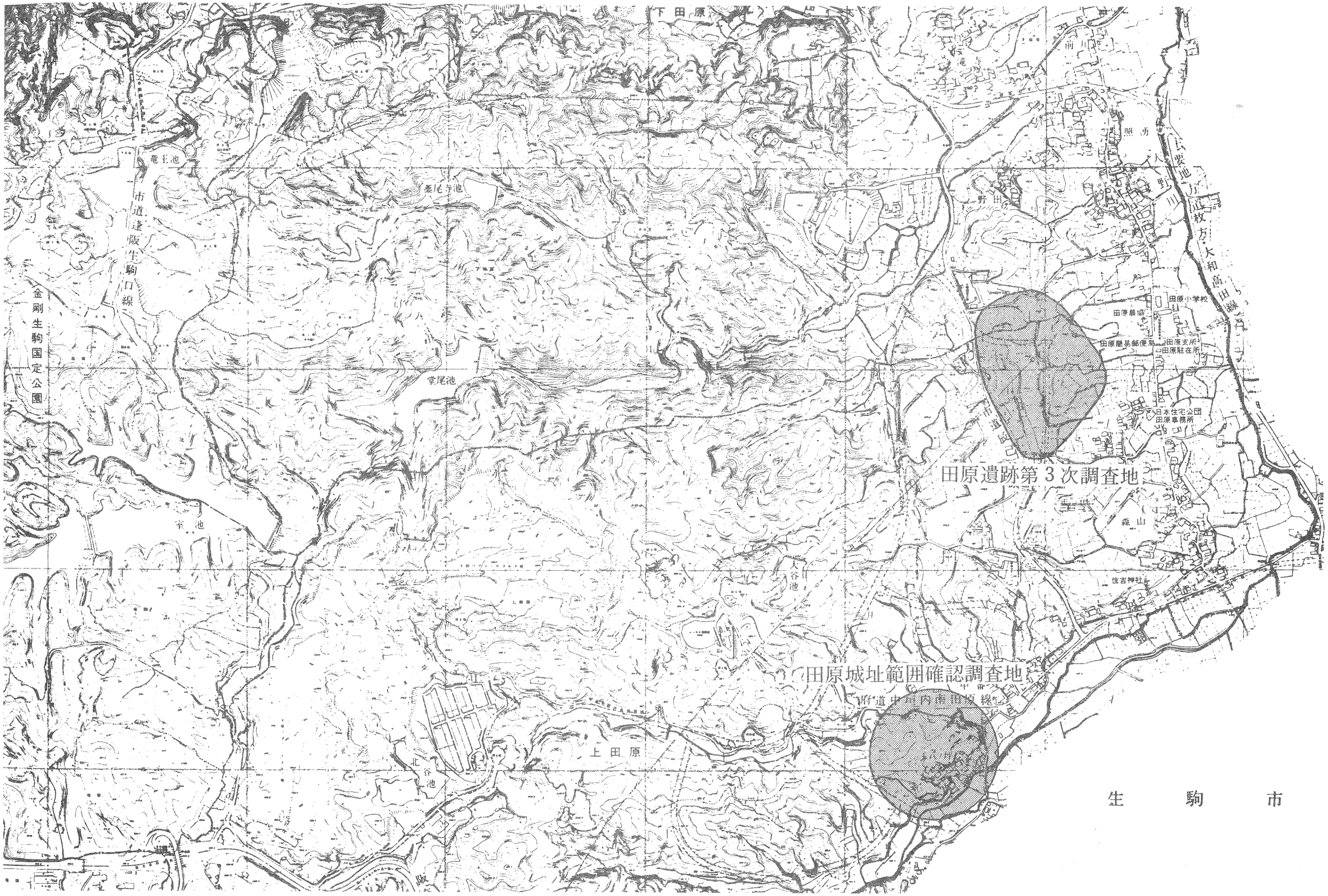
第4トレンチは、南北方向にのびる谷地形があり、その西側に位置する、標高T.P169mの山林に幅4m、長さ15mの東西方向にトレンチを設定した。

トレンチ設定場所が尾根の斜面であったため層序は、第1層厚さ20cmの表土、第Ⅱ層厚さ約15～20cmの黄褐色砂質土が堆積するだけで地山となる。トレンチ内からの出土遺物を見い出すことはできなかった。

第5トレンチは、第4トレンチ設定の尾根と田原城址構造図に示す裏山郭との間にある

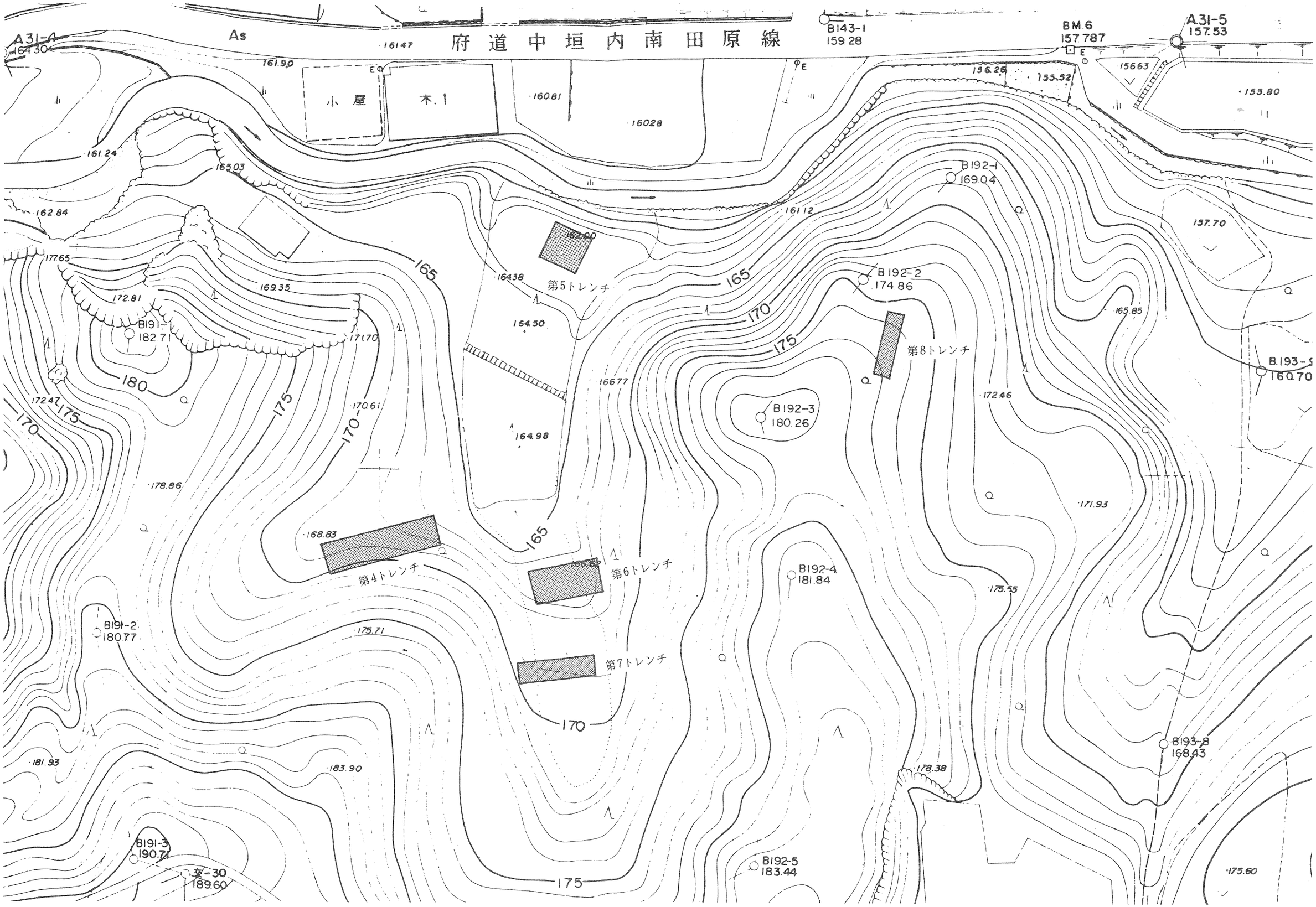


第2図　田原城址平面図



第３図　第３次調査位置図

第4図　田原城南濠調査地位置図



第5図　田原城北濠調査地位置図

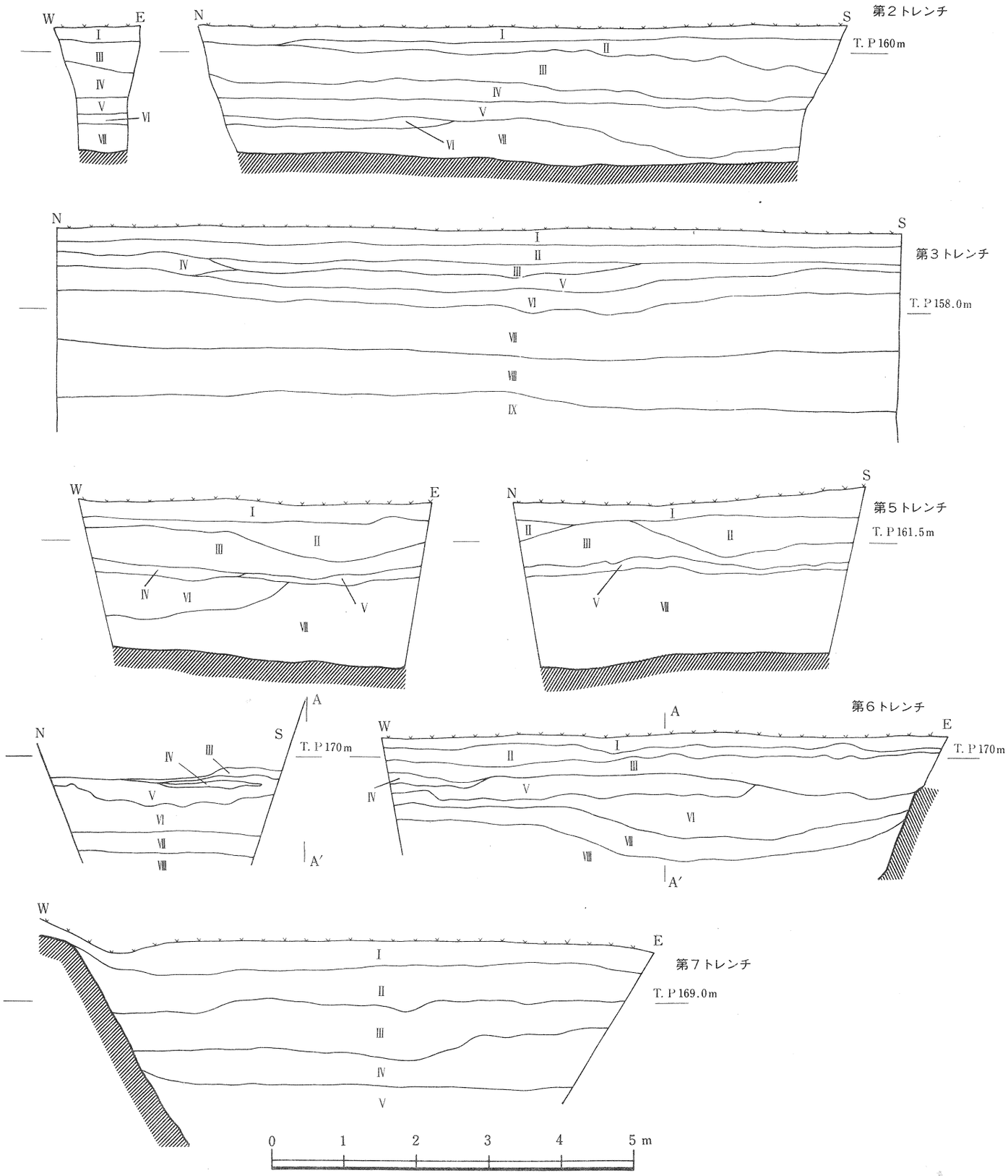
第２トレンチ
Ⅰ　耕土
Ⅱ　床土
Ⅲ　黒褐色砂層
Ⅳ　青灰色砂層
Ⅴ　青灰色砂層（小礫混り）
Ⅵ　青灰色粘土
Ⅶ　青灰色砂層

第３トレンチ
Ⅰ　耕土
Ⅱ　床土
Ⅲ　黒褐色粘土層
Ⅳ　褐色砂質土層
Ⅴ　青灰色砂層
Ⅵ　青灰色粘土層
Ⅶ　青灰色砂層
Ⅷ　黒褐色粘土層

第５トレンチ
Ⅰ　表土
Ⅱ　黄褐色砂層（粘土混り）
Ⅲ　黄褐色砂層
Ⅳ　灰褐色砂層
Ⅴ　黒褐色粘土層
Ⅵ　黄褐色砂層（粘土混り）
Ⅶ　青灰色砂層（粘土混り）

第６トレンチ
Ⅰ　表土
Ⅱ　暗褐色砂層
Ⅲ　赤褐色砂層（粘土混り）
Ⅳ　黒褐色砂層
Ⅴ　灰褐色砂層
Ⅵ　青灰色砂層
Ⅶ　青灰色砂層（粘土混り）
Ⅷ

第７トレンチ
Ⅰ　表土
Ⅱ　黄褐色砂層
Ⅲ　赤褐色砂層
Ⅳ　灰褐色砂層（粘土混り）
Ⅴ



第６図　田原城濠内トレンチ断面実測図

谷地形最下段の上田原791番地に所在する旧水田地に幅5m、長さ5mのトレンチを設定した。旧水田面の標高はT.P162.0m、層序は第Ⅰ層表土、第Ⅱ層厚さ約10～60cmの黄褐色砂層（粘土混り）で、第Ⅲ層厚さ約20～50cmの黄褐色砂層、第Ⅳ層厚さ約15cmの灰褐色砂層、第Ⅴ層厚さ約15～20cmの黒褐色粘土、第Ⅵ層厚さ約60cmの黄褐色砂層（粘土混り）第Ⅶ層厚さ約130cmの青灰色砂層（粘土混り）がそれぞれ堆積し地山となる。

東側断面第Ⅱ層内から、川原石を敷きつめた石敷遺構が検出し、中から土師質小皿、陶器、瓦質土器が出土している。第Ⅳ層内から銅製品1点、第Ⅴ層内から元豊通宝1点、瓦器椀、第Ⅵ層内から羽釜、瓦、須恵器坏身、第Ⅶ層内から土師質小皿が出土している。

元豊通宝は（北宋）1078～1085年に鋳造されたものであり、瓦器椀は、口縁部内面に1本の沈線をめぐり、高台は退化してわずかに残存する貼り付け高台を呈する。内面には、粗くてうすい螺施形の暗文がめぐるものや、最下層出土の土師質小皿は体部上半へのヨコナデは弱く、ナデ自体は口縁内外面に重点が置かれ、底部の突起は発達し、ヘソ皿として定型化しているものである。出土した遺物からみて、13世紀後半から、14世紀中葉に比定される。

第6トレンチは、第4トレンチのすぐ東側の現杉林地に幅4m、長さ8mの東西方向にトレンチを設定した。層序は、第Ⅰ層表土、第Ⅱ層約20cmの暗褐色砂層、第Ⅲ層約10～60cmの赤褐色砂層（粘土混り）、第Ⅳ層約20cmの黒褐色砂層、第Ⅴ層約30cmの灰褐色砂層、第Ⅵ層約60cmの青灰色砂層、第Ⅶ層約30cmの青灰色砂層（粘土混り）が堆積し、第Ⅷ層下については、トレンチ内断面が崩れトレンチ調査が不可能となったため、径25cmのボーリング調査に切り替えた結果、地表下約3.5mで地山を確認することができた。すなわち、北側断面実測で示したように田原城址側（東側）斜面の地山面の一部を検出することができた。この地山面が田原城址の西側にかかる濠跡の一部のものであり、この濠跡を含むものが田原城址の範囲であることが明確になった。

次に各層序からの出土遺物としては、第Ⅱ層内から土師質小皿、瓦質土器が出土している。

第7トレンチは、第6トレンチより一枚上段の杉林地に幅2m、長さ8.5mの東西方向にトレンチを設定した。トレンチの設定は第6トレンチにおいて田原城址西側斜面濠を確認するために設定したもので表土面は標高T.P170.0mで、層序は第Ⅰ層表土、第Ⅱ層約50cmの黄褐色砂層、第Ⅲ層約60～70cmの赤褐色砂層、第Ⅳ層約40～50cmの灰褐色砂層（粘土混り）が堆積している。第Ⅲ層内から磁器、土師質小皿が出土している。

第6トレンチ同様表土下約2mまでの調査で断面が崩れ調査不可能となった。しかし、このトレンチにおいては北側にのびる尾根の東側斜面地山面を一部確認することが出来た。第6トレンチと第7トレンチにおいて、標高167～169mの等高線上においては田原城址濠

幅は約12～15ｍと考えられる。すなわちこの濠底部と裏山郭との比高差は18～20ｍにおよび幅も約30～40ｍという急崖にのぞむものであった。すなわち裏山づたいの防禦陣地を構成したもので周囲を深い絶壁に廻らされ、天然の要塞をなしている。

第８トレンチは裏山郭の北側にのびる尾根の先端斜面に幅２ｍ、長さ8.5ｍの南北方向にトレンチを設定した。この尾根の先端部の標高180.26ｍのフラット面にトレンチを設定することが出来なかったもので、尾根先端斜面に、第８トレンチとして設定したものである。層序は第Ⅰ層表土下すぐに地山になっており、流出土及び堆積土は全く検出されていない。

田原遺跡第３次発掘調査

第３次発掘調査は、市道辰巳谷線の東側丘陵一帯と、東側に派生する丘陵と丘陵との谷間に合わせて、25ヶ所のトレンチを設定した。以下各トレンチの層序を述べることにしたい。

第１トレンチは、市道辰巳谷線に近い標高154.0ｍに幅2.7ｍ、長さ24ｍの南北方向にトレンチを設定した。層序は第Ⅰ層表土、第Ⅱ層床土、第Ⅲ層厚さ約30㎝の茶褐色砂層、第Ⅳ層は厚さ約25～40㎝の白褐色砂層、第Ⅴ層は厚さ約100㎝の黄褐色砂層が堆積している。第Ⅳ層及び第Ⅴ層内に白灰色粘土層がブロック状に入り込んでおり、この白灰色粘土層は後に述べる丘陵上における地山層である。

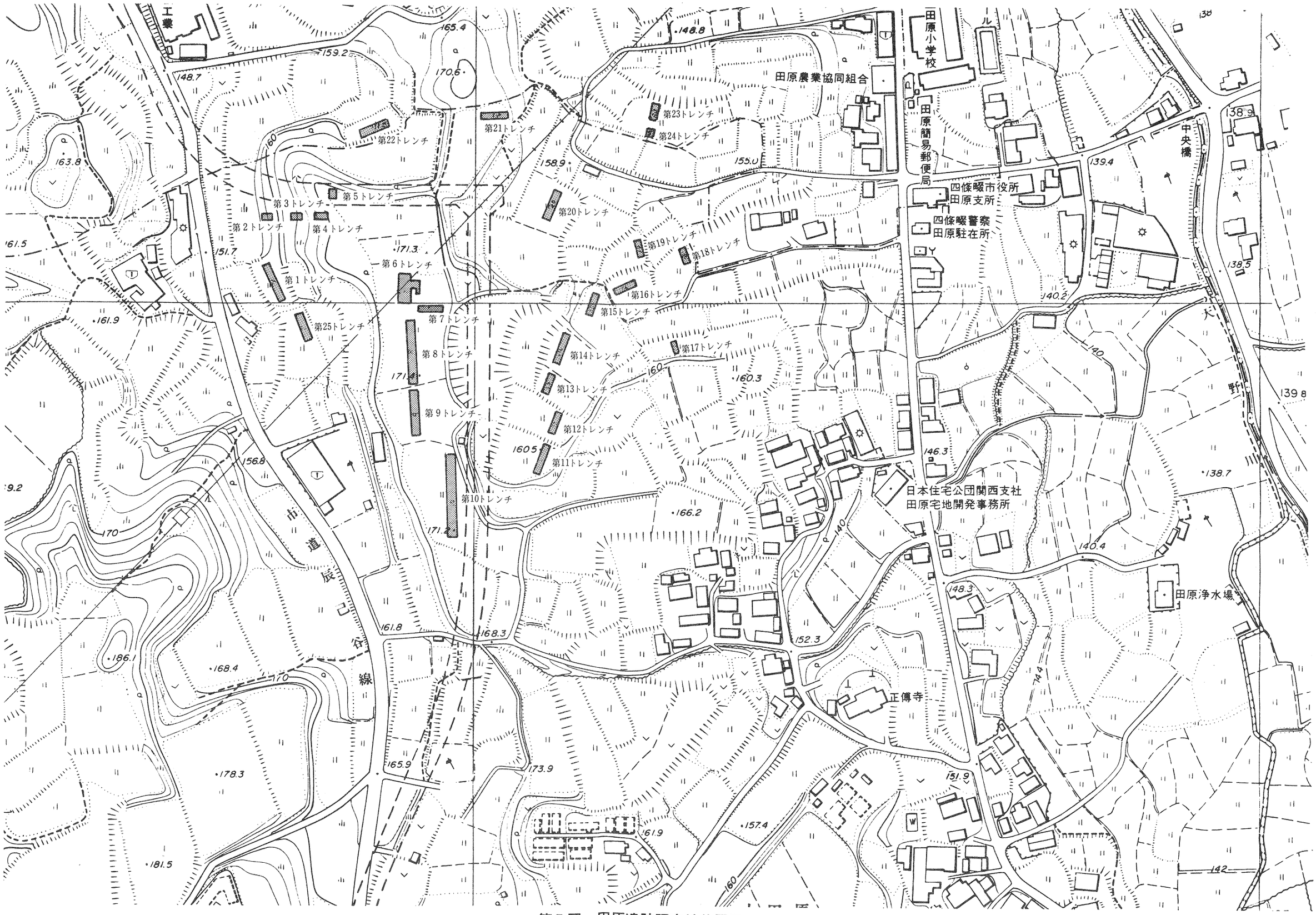
第２～第５トレンチは、第１トレンチの北東近くに位置する松林内に幅0.8ｍ×長さ1.0ｍのトレンチを設定した。第２トレンチ～第４トレンチは丘陵先端傾斜面であったため、第Ⅰ層表土、第Ⅱ層黄褐色砂層が堆積し地山となる。第５トレンチの層序は、第Ⅱ層厚さ約20㎝の黄褐色礫層、第Ⅲ層厚さ約10～20㎝の白褐色砂層、第Ⅳ層厚さ約20㎝の黄褐色砂層（礫混り）、第Ⅴ層厚さ約15㎝の白褐色砂層（礫混り）がそれぞれ堆積し地山となる。

第６トレンチは丘陵上にある関西電力北田原電源開発変電所への送電鉄塔の南側の130-１番地に幅６ｍ、長さ16ｍの南北方向のトレンチを設定したところ、トレンチ東側端において落ち込みが検出したためトレンチ東側に幅約２ｍ、長さ５ｍのＬ字形にトレンチを拡大して調査を実施した。

層序は第Ⅲ層厚さ約30㎝の黄褐色砂質土、第Ⅳ層厚さ約20～30㎝の暗褐色砂質土、第Ⅴ層厚さ約60～100㎝の茶褐色粘土（礫混り）、第Ⅵ層厚さ約40～60㎝の赤褐色粘土がそれぞれ堆積し地山となる。北断面実測図でもわかるように、西から東に、又、南から北への地山傾斜面を見い出すことができた。

第７トレンチは、第６トレンチで地山傾斜面を検出することが出来たが、同一地山傾斜面が東側にどのように続くかを確認するために第６トレンチの南東位置に幅2.8m長さ10mの東西方向にトレンチを設定した。

層序は第Ⅲ層厚さ約20～50㎝の白色砂層（礫混り）はトレンチ中央部から南傾斜面に堆



第7図　田原遺跡調査地位置図

第4トレンチ
Ⅰ 表土
Ⅱ 黄褐色砂層

第5トレンチ
Ⅰ 表土
Ⅱ 黄褐色礫層
Ⅲ 白褐色砂層
Ⅳ 黄褐色砂層（礫混り）
Ⅴ 白褐色砂層

第6トレンチ
Ⅰ 耕土
Ⅱ 床土
Ⅲ 赤褐色砂層
Ⅳ 暗褐色砂層
Ⅴ 赤褐色砂質土
Ⅵ 赤褐色粘土（礫混り）

第7トレンチ
Ⅰ 耕土
Ⅱ 床土
Ⅲ 白色砂層（礫混り）
Ⅳa 黄色小礫層
Ⅳb 白色砂層
Ⅴ 白色小礫層
Ⅵ 黄色小礫層
Ⅶ 赤色礫層（部分粘土）
Ⅷ 赤色砂礫層

第8トレンチ　地番 127-1
Ⅰ 耕土
Ⅱ 床土
Ⅲa 暗褐色砂層（礫混り）
Ⅲb 赤褐色砂層（礫混り）
Ⅲc 赤褐色砂層
Ⅲd 暗褐色砂層
Ⅳ 黄褐色砂層（礫混り）
Ⅴ 白褐色砂層
Ⅵ 黄褐色砂層
Ⅶ 赤褐色砂層
Ⅷ 黄褐色砂層
Ⅸ 赤褐色砂層

第9トレンチ
Ⅰ 耕土
Ⅱ 床土
Ⅲa 暗褐色砂層（部分粘土）
Ⅲb 黄褐色粘質土
Ⅲc 赤褐色粘土
Ⅲd 茶褐色砂層（粘土混り）
Ⅳ 赤褐色砂層（礫混り及び部分粘土）
Ⅴ 赤褐色砂層（礫混り）
Ⅵ 茶褐色砂層（礫混り）
Ⅶa 赤褐色砂層（部分粘土）
Ⅶb 黄褐色砂層（部分粘土）
Ⅷ 赤褐色粘土
Ⅸ 灰褐色粘土
Ⅹ 赤褐色砂層（部分粘土）

第13トレンチ　地番 145-1
Ⅰ 耕土
Ⅱ 床土
Ⅲ 灰褐色砂層（部分粘土）
Ⅳ 灰褐色粘土
Ⅴ 赤褐色粘土
Ⅵ 赤褐色砂層（礫混り）
Ⅶ 赤褐色砂層（部分粘土）
Ⅷ 茶褐色砂層（小砂利混り）
Ⅸ 黄褐色砂層（小砂利混り）
Ⅹ 赤褐色砂層

第11トレンチ　地番 145-1
Ⅰ 耕土
Ⅱ 灰褐色砂層（粘土混り）
Ⅲ 床土
Ⅳ 赤褐色砂層
Ⅴ 黄褐色砂層（粘土混り）
Ⅵ 赤褐色砂層（礫混り）
Ⅶ 赤褐色粘土層
Ⅷ 黄褐色砂層

第8図　田原遺跡第3次調査トレンチ断面実測図・Ⅰ

積していた。第Ⅳ層の白色砂層内にブロック状に黄色小礫層が流れ込む状態で検出している。第Ⅴ層の白色小礫層、第Ⅵ層黄色小礫層、第Ⅶ層赤色礫層（部分粘土）、第Ⅷ層赤色砂礫層はトレンチ西側から中央部にかけてのみ堆積されて地山になる。トレンチ西端において耕土下約30㎝で地上に達するが東端においては約1.3ｍで地山が検出された。

第８トレンチは、第６トレンチの南側に同一線上に幅３ｍ、長さ32ｍのトレンチを南北方向に設定。層序は第Ⅲａ層厚さ約30㎝の暗褐色砂層(礫混り)、第Ⅲｂ層厚さ約40～50㎝の黄褐色砂礫混り層、第Ⅳ層厚さ約40～60㎝の褐色砂質土が次の第Ⅴ層青灰褐色砂質土層内にブロック状に堆積している。第Ⅵ層は厚さ約40㎝の褐色砂質土（小礫混り層）、第Ⅶ層は厚さ約40～60㎝の赤褐色砂質土がトレンチ全域に検出し、一部下層で地山となる。しかし、トレンチ南側において第Ⅷ層の白褐色砂質土が南から北への堆積が認められた。

東壁断面での最下層は第８トレンチ同様厚さ約40㎝の赤褐色砂層が堆積して地山となる。地山面は北から南へのゆるやかな傾斜であり、又、西から東にかけて急傾斜で落ちていくことが断面実測図から明らかである。

第９トレンチは、第８トレンチの南側に同一線上に幅３ｍ、長さ31ｍのトレンチを南北方向に設定。層序は第Ⅲａ層厚さ約15㎝の暗褐色砂層（礫混り）、第Ⅲｂ層厚さ約10㎝の黄褐色砂礫混り層がブロック状に堆積している。第Ⅳ層厚さ約80～90㎝の褐色砂質土、第Ⅴ層厚さ約20㎝の青灰色砂質土、第Ⅵ層厚さ約20～60㎝の褐色砂質土（小礫混り層）、第Ⅶ層厚さ約25㎝の赤褐色砂質土、第Ⅷ層厚さ60～80㎝の白褐色砂質土が堆積し地山となる。
地山面は第８トレンチ同様、西から東へかけて傾斜していく。

第10トレンチは、第９トレンチ設定の南側水田地に位置し、今回の第３次発掘調査地区の最南端に幅３ｍ、長さ34ｍの南北方向にトレンチを設定した。層序は第Ⅰ層耕土、第Ⅱ層床土、第Ⅲ層厚さ約100～110㎝の黄褐色砂層が堆積し地山となる。

第11トレンチは、第９トレンチ及び第10トレンチの東側の谷地形の水田地に設定したものである。トレンチの規模は幅３ｍ、長さ23ｍのトレンチを南北方向に設定。層序は、第Ⅰ層耕土、第Ⅱ層約10㎝の灰褐色砂層（粘土混り）、第Ⅲａ層がこの水田の床土面と考えられる。第Ⅲｂ層の赤褐色砂層は床土内にブロック状に堆積しており、同一層がトレンチ南側の第Ⅶａ層内にもブロック状に堆積している。第Ⅳ層黒赤褐色砂層（小砂利混り）、第Ⅴ層はトレンチ中央部から北側に厚さ約40～150㎝の赤褐色砂層、第Ⅵａ層は厚さ約20～60㎝の赤褐色砂層（炭混り）、第Ⅵｂ層は厚さ約40㎝の黄褐色砂層がブロック状に堆積している。第Ⅶａ層はトレンチ南側から北側にかけて床土下から約140㎝にわたり堆積している。第Ⅶａ層は黄褐色砂層（礫混り）、第Ⅶｂ層はⅦａ層内にブロック状に堆積している黄褐色砂層（粘土混り）、第Ⅷ層は厚さ約100㎝の赤褐色粘土層がトレンチ南側で床土下で検出した。第Ⅷ層下に厚さ約20㎝の黄褐色砂層が堆積し地山となる。トレンチ南側から北側にかけて

ゆるやかに傾斜している。

第12トレンチは、第11トレンチの北側に幅３ｍ、長さ12.5ｍのトレンチを南北方向に設定した。層序は、第Ⅰ層耕土、第Ⅱ層床土、第Ⅲａ層は厚さ約20㎝の黄褐色砂層(部分粘土)第Ⅲｂ層赤褐色粘質土、第Ⅲｃ層赤褐色粘土、第Ⅲｄ層茶褐色砂層（粘土混り）がブロック状に堆積している。第Ⅳ層は厚さ約70㎝の赤褐色砂層（礫混り及び部分粘土）、第Ⅴ層以下の赤褐色砂層（礫混り）、第Ⅵ層茶褐色砂層（礫混り）、第Ⅶａ層赤褐色砂層（部分粘土）、第Ⅶｂ層黄褐色砂層（部分粘土）、第Ⅷ層赤褐色粘土、第Ⅸ層灰褐色粘土、第Ⅹ層赤褐色砂層（部分粘土）がそれぞれトレンチ南から北側に傾斜しながら堆積しており、このトレンチにおいては地山を検出することが出来ていない。

第13トレンチは、第12トレンチの北側に幅３ｍ、長さ14.5ｍのトレンチを南北方向に設定した。層序は第Ⅲ層厚さ20～30㎝の灰褐色砂層（部分粘土）、第Ⅳ層は厚さ約20～60㎝の灰褐色粘土、第Ⅴ層は第Ⅳ層内に赤褐色粘土層がブロック状に堆積している。第Ⅵ層はトレンチ中央部において床土下から赤褐色砂層（礫混り）、第Ⅶ層は赤褐色砂層（部分粘土）、第Ⅷ層は厚さ約40㎝の茶褐色砂層（小砂利混り）が第Ⅵ層と同一層位まで堆積し、第Ⅸ層は厚さ20～70㎝の黄褐色砂層（小砂利混り）及び第Ⅹ層厚さ約20㎝の赤褐色砂層で地山となる。

第14トレンチは、第13トレンチの北側に幅３ｍ、長さ13ｍのトレンチを南北方向に設定した。層序は、第Ⅱ層床土と第Ⅳ層黄褐色砂層との間に第Ⅲａ層、第Ⅲｂ層の黄褐色砂層（小砂利混り）が厚さ約10㎝でブロック状に堆積している。第Ⅴ層は厚さ約20㎝の灰褐色砂層（礫混り）、第Ⅵ層は厚さ約130㎝の青褐色砂層、第Ⅶｂ層は黄褐色砂層（粘土、礫混り)、地山直上の第Ⅷ層は厚さ約60㎝の赤褐色砂層（粘土混り）がそれぞれ堆積し地山となる。

第15トレンチは、この谷水田の中程位置に位置している。トレンチの規模は幅３ｍ、長さ13ｍの南北方向のトレンチを設定した。層序は、第Ⅱ層床土、第Ⅲ層は厚さ約20㎝の赤褐色砂層、第Ⅳ層は厚さ約10㎝の黄褐色砂層（小砂利混り)、第Ⅴ層は約140㎝の白褐色砂層（礫混り）の堆積土中に約40㎝の黄褐色砂層（砂利混り）がブロック状に堆積している。最下層は厚さ約10～15㎝の灰褐色砂層である。

第16トレンチは、第15トレンチより一段低い水田地に幅３ｍ、長さ６ｍのトレンチを東西方向に設定。層序は、第Ⅱ層床土、下に第Ⅲａ層の灰褐色砂層、第Ⅲｂ層の赤褐色砂層が約８㎝の厚さでブロック状的に堆積している。第Ⅳ層は各トレンチ全域にみられる厚さ約90～100㎝の黄褐色砂層（小砂利混り)、第Ⅴ層は厚さ約60～70㎝の黄褐色砂層が堆積し一部で地山となる。他の一部において第Ⅵ層厚さ約30㎝の赤褐色砂層（粘土混り）が堆積し地山となる。

第14トレンチ　地番 146
Ⅰ　耕土
Ⅱ　床土
Ⅲa 黄褐色砂層（小砂利混り）
Ⅲb 黄褐色砂層（粘土混り）
Ⅳ　黄褐色砂層
（粘土混り、礫混り）
Ⅴ　灰褐色砂層（礫混り）
Ⅵ　黄褐色砂層
Ⅶa 黄褐色砂層（粘土混り）
Ⅶb 黄褐色砂層（粘土、礫混り）
Ⅶ　赤褐色砂層（粘土混り）

第15トレンチ　地番 141
Ⅰ　耕土
Ⅱ　床土
Ⅲ　赤褐色砂層（炭混り）
Ⅳ　黄褐色砂層（小砂利混り）
Ⅴa 白褐色砂層（礫混り）
Ⅴb 黄褐色砂層（砂利混り）
Ⅴc 赤褐色砂層（小砂利混り）
Ⅵ　灰褐色砂層（粘土混り）
Ⅶ　白褐色砂層

第16トレンチ　地番 128-2、
Ⅰ　耕土
Ⅱ　床土
Ⅲa 灰褐色砂層
Ⅲb 赤褐色砂層
Ⅳ　黄褐色砂層（小砂利混り）
Ⅴ　黄褐色砂層
Ⅵ　赤褐色砂層（粘土混り）

第17トレンチ　地番 144-1
Ⅰ　耕土
Ⅱ　床土
Ⅲ　赤褐色砂層（粘土混り）
Ⅳ　茶褐色砂層（粘土混り）
Ⅴ　茶灰褐色砂層（礫混り）
Ⅵ　黄褐色砂層
Ⅶ　赤褐色砂層

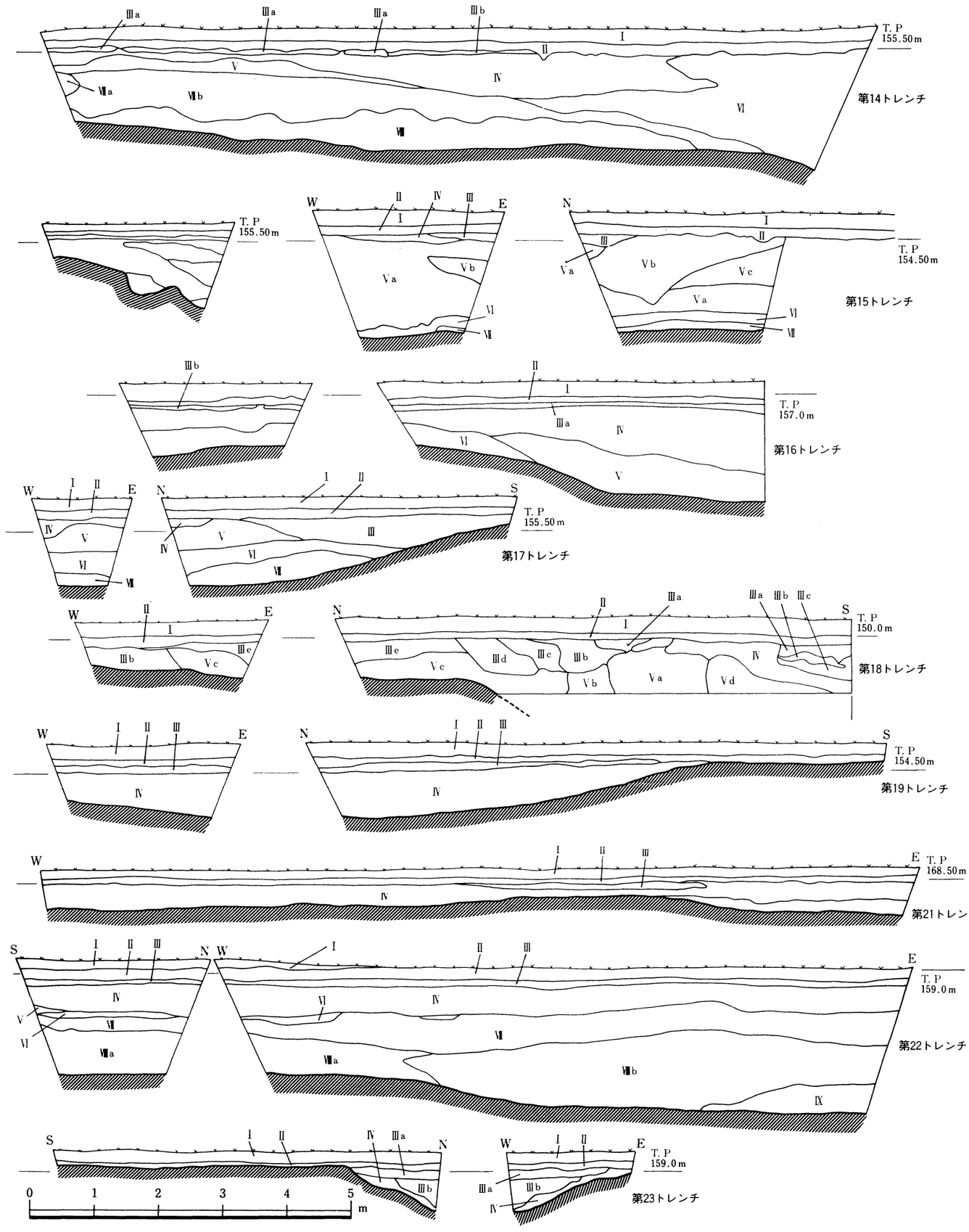
第18トレンチ　地番 144-2
Ⅰ　耕土
Ⅱ　床土
Ⅲa 黄褐色砂層（粘土混り）
Ⅲb 赤褐色粘土層
Ⅲc 黄褐色砂層
Ⅲd 赤褐色粘土層（砂利混り）
Ⅲe 灰褐色砂層（粘土混り）
Ⅳ　灰褐色砂層
Ⅴa 黄褐色砂層
Ⅴb 黄褐色砂層（砂利混り）
Ⅴc 黄褐色砂層（粘土混り）
Ⅴd 赤灰褐色砂層

第19トレンチ　地番 126-3
Ⅰ　耕土
Ⅱ　床土
Ⅲ　赤褐色砂層（粘土混り）
Ⅳ　黄褐色砂層

第21トレンチ　地番 130-4
Ⅰ　耕土
Ⅱ　床土
Ⅲ　灰褐色粘土層
Ⅳ　赤褐色砂層（部分粘土）
Ⅴ　灰褐色粘土層

第22トレンチ　地番1519-1
Ⅰ　白砂層
Ⅱ　耕土
Ⅲ　床土
Ⅳ　黄褐色砂層（砂利混り）
Ⅴ　赤褐色粘土層（砂混り）
Ⅵ　灰褐色粘土層
Ⅶ　赤褐色粘土層（砂混り）
Ⅶa 黄褐色砂層（砂利混り）
Ⅶb 茶褐色砂層（粘土及び砂利混り）
Ⅸ　黄褐色砂層（砂利混り）

第23トレンチ　地番1673-4
Ⅰ　耕土
Ⅱ　床土
Ⅲa 赤褐色粘土層（砂混り）
Ⅲb 茶褐色粘土層（砂混り）
Ⅳ　灰茶褐色粘土層



第９図　田原遺跡第３次調査トレンチ断面実測図・Ⅱ

第17トレンチは谷水田方向の南東斜面に位置する水田地に幅1.6ｍ、長さ5.50ｍのトレンチを南北方向に設定した。層序は第Ⅱ層床土下に第Ⅲ層は厚さ約15～40㎝の赤褐色砂層（粘土混り）で一部地山となる。北壁断面では第Ⅲ層下に約10～30㎝の茶褐色砂層（粘土混り）、第Ⅴ層茶灰褐色砂層（礫混り）、第Ⅵ層黄褐色砂層、第Ⅶ層赤褐色砂層で地山となり表土下約140㎝の堆積土層からなっている。

第18トレンチは調査地の最東端の最低水田地に幅３ｍ、長さ８ｍの南北方向にトレンチを設定した。層序は、第Ⅱ層床土下に第Ⅲａ層から第Ⅲｂ層までブロック状に堆積する。堆積する各層は第Ⅲａ層赤褐色砂層（砂利混り）、第Ⅲｂ層赤褐色粘土、第Ⅲｃ層黄褐色砂層、第Ⅳｄ層赤褐色粘土（砂利混り）であり、第Ⅳ層灰褐色砂層は第Ⅲ層の下層にもぐり込み一部地山となる。又、第Ⅴ層は厚さ約10～60㎝の黄褐色砂層でこの第Ⅴ層も第Ⅴａから第Ⅴｃ層までブロック状に堆積している。

第19トレンチは、第17トレンチの谷水田地を挟む位置にある。トレンチの規模は、幅３ｍ、長さ９ｍの南北方向のトレンチを設定した。層序は東側断面でみると第Ⅰ層耕土、第Ⅱ層床土で一部地山となり、トレンチ北側の方向では第Ⅲ層厚さ10㎝の赤褐色砂層（粘土混り）、第Ⅳ層厚さ約50㎝の黄褐色砂層で地山となる。

V　まとめ

第３次発掘調査の田原城址範囲確認調査地は、第２図の田原城址平面図に示したところの西砦の西側の深い絶壁下の標高 T.P 157.83 ～160.53m の棚田式谷水田地と府道中垣内南田原線の古堤街道の南に位置する旧谷水田地の標高 T.P 162.0 ～169.3m の棚田式谷水田地に計８ヶ所のトレンチを設定した。各トレンチ内の堆積土層については第Ⅳ章においてくわしく述べたとおりである。現在まで田原城址については四條畷市史執筆者の山口博氏が貧弱な史料の中から、天保15年、上田原村差出明細帳に「古城跡、字城山、壱ケ所但し、凡弐百年以前永祿之比、当地守護田原対馬守様御城跡と申伝候」とあって、田原対馬守なる田原領主が永祿年間（1560年代）、田原城に拠って当地を支配していたと、くわしく研究されている。同氏の研究史は文献を中心に田原城址削平地の館跡を構造図に示されているもので田原城址研究史上きわめて重要な構造図であった。

この田原城について第１に、いつにこの田原城が構築されたかという問題であるが、山口氏は田原城構築を15世紀後半の河内守護畠山家の内紛頃に始まるのではないかと考えられている。このように田原城は１回も発掘調査のメスを入れることがなかった。

田原城址の範囲については、本丸を中心とした北、東、南の三方については深い絶壁に廻らされた山水河流の囲繞した濠を構成していたが今回の城北西側の範囲があと一歩明確にされていなかった。しかしこの範囲確認調査の結果先にも述べた棚田式谷水田地にトレンチであったが急傾斜面を呈する濠跡をそれぞれ確認することが出来、田原城構造図に追加して範囲を示すところまできている。又第１の問題とされていた構築時期については、濠内堆積土層内から出土した元豊通宝の銭と古墳時代後期の須恵器以外については、ほぼ田原城構築時期を決める資料が出土した。すなわち出土した土師質小皿及び、瓦器椀、羽釜、摺鉢、瀬戸焼おろし皿、伊万里焼などからみて、上限年代を14世紀中葉に比定することが出来る。北宋銭の元豊通宝（1078～1085）が出土したもののこの時期に比定される土器は現在のところ出土していない。

田原遺跡第３次発掘調査地区においては、第６トレンチから第10トレンチまでの５ヶ所のトレンチから地山傾斜面が南から北へゆるやかに傾斜し、又、西から東にかけて地山は急傾斜を呈していることが明らかになった。次に第11トレンチから第15トレンチの谷水田から中世末から近世の陶磁器と砥石が出土している。この近世の土器や炭が出土していることは、近世開懇時のものか、下田原の佐水、正伝寺西側台地上、「古城」と字地されることからこの一帯に田原領主の居館跡に関する資料かは不明であるが、この台地上に住んでいた遺構等が近世に削平され谷地形地に埋めたものであろう。

次に日本住宅公団田原団地建設予定地内の文化財発掘調査で検出された遺構、遺物につ

いて簡単に説明しておきたい。これまでに検出された遺構は、縄文時代早期の落ち込み状遺構（石組）２基、中世の落ち込み状遺構、掘立柱建物跡、土壙状遺構、溝状遺構が確認され各遺構内から豊富な各種遺物が出土した。

第２次調査の際出土した中世の土壙状遺構内から出土した75枚にのぼる土師質小皿が一括して出土し、又、落ち込み状遺構は表土下約3.6mの深さで今日まで攪乱されることなく15層の堆積土層が観察することができた。

戎川左岸に検出した縄文時代早期の押型文土器に伴なう落ち込み状遺構を取り囲むように検出された花崗岩の石列が検出したことは、交野市神宮寺遺跡、枚方市穂谷遺跡だけでなく近畿地方の縄文時代早期の文化を研究する上で重要な資料である。又、縄文時代早期出土の押型文土器出土層上面から弥生時代前期の壺が１点出土している。この弥生式土器は現存高22,3㎝胴径最大径23,0㎝で胴部中央に最大径を有し、胴部より頸部にかけて、３条・６条の貼り付け突帯に刻み目をもち、外面胴部にハケ目を施こす畿内北部に特徴をもつ摂津の土器であり、唐古第１様式（新）の時期のものである。

ここで今回までの調査によって得られた成果を本概要報告書にしめくくることにしたい。

田原盆地に初めて人類が住みついた年代については、縄文時代早期の山型文、楕円文の押型文土器、貝殻条痕文、過擦文を施した土器が出土した時期の人類がこの田原の里に長期間住みつき生活したものである。この縄文式土器と同一層内から出土したサヌカイト製尖頭器・細石器・石核等の出土から人類の住みついた縄文時代早期より一時期古い旧石器時代人が住んでいた可能性も出てきている。

又、出土した弥生式土器から北河内の弥生遺跡の出現が寝屋川市太秦遺跡の弥生時代中期に始めて出現しているがこれより一時期早い前期に天の川水系の田原において住みついている。弥生時代については、田原盆地の今後の研究課題の一つとなるだろう。

古墳時代については、国道163号線のすぐ南に派生する丘陵上に横穴式石室が分布調査において発見され、又、田原城址濠内からの出土とあわせて、この田原の派生する丘陵の突端部に数多くの古墳が今後も検出する可能性がある。

中世については始めに述べた各遺構から出土した瓦器椀編年から落ち込み状遺構が12世紀の中頃～後期につくられ13世紀に埋められている。その他の遺構も14世紀代に作られ、掘立柱建物跡から終末期の瓦器椀が出土している。最も新しい時期の遺構としては土壙状遺構があげられる。出土した土師質皿には全く瓦器椀を伴出しておらず15世紀代のものである。

最後にこの田原に係るものとして「田原鋳銭司」のことを述べておきたい。栄原永遠男氏が、古代を考える10「河内国府と国分寺址の検討」の中で「鋳銭司の変遷と立地につい

て —「河内鋳銭司」にふれて — と題して報告されている。この本文中に山城鋳銭司（加茂町銭司）とほぼ並存すると考えられている「田原鋳銭司」が生駒市から四條畷市にかけての地域に比定されている説があり、この裏付け資料として『大日本古文書』（編年）16巻に天平宝字6年に編年した誤りを宝字4年（760）に二貫二百十四文自生馬輪束山運和炭并炭二百卌四斛一斗雇車十八両賃八十文自生馬鷹山運炭八斛車一両賃、二貫九十二文自輪束山運炭二百廿二斛一斗車十六両賃十二両別百卅一文 四両別百卅文 卌二文自登美銭司村運炭十四斛車一両賃。

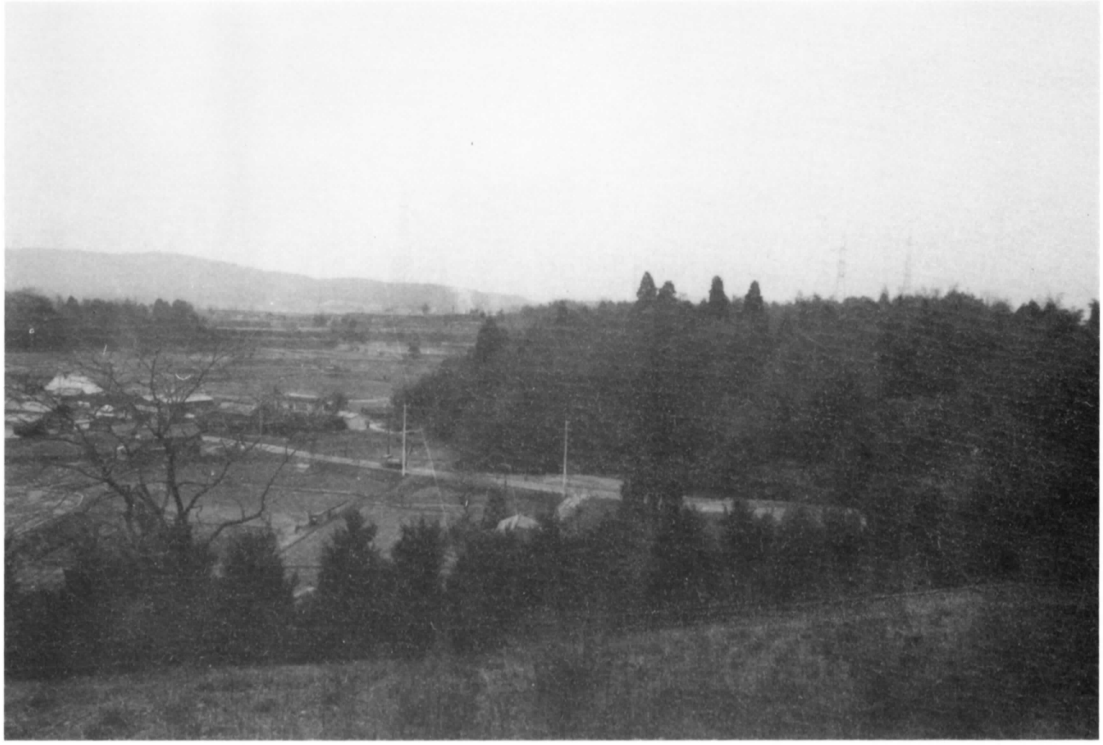
この中で「登美銭司村」「輪束山」があり輪束山は相楽郡和束町の地名が現存しており、「生馬鷹山」や「登美銭司村」は清滝街道と富雄川との交叉する地域に「高山」というところがある。すなわち登美銭司村がこの富雄川の下流の現在地名の登美ケ丘町があり和炭の産地でもある。すなわちこの「田原鋳銭司」もこの付近と考えられ、生駒市「北田原」「南田原」か、四條畷市「上田原」「下田原」付近と考えられている。今後この日本住宅公団田原団地建設予定地内に直接鋳銭関係を示す、るつぼ、ふいご口、鉱滓、凹石、銅塊等が将来出土する可能性が出てきた。

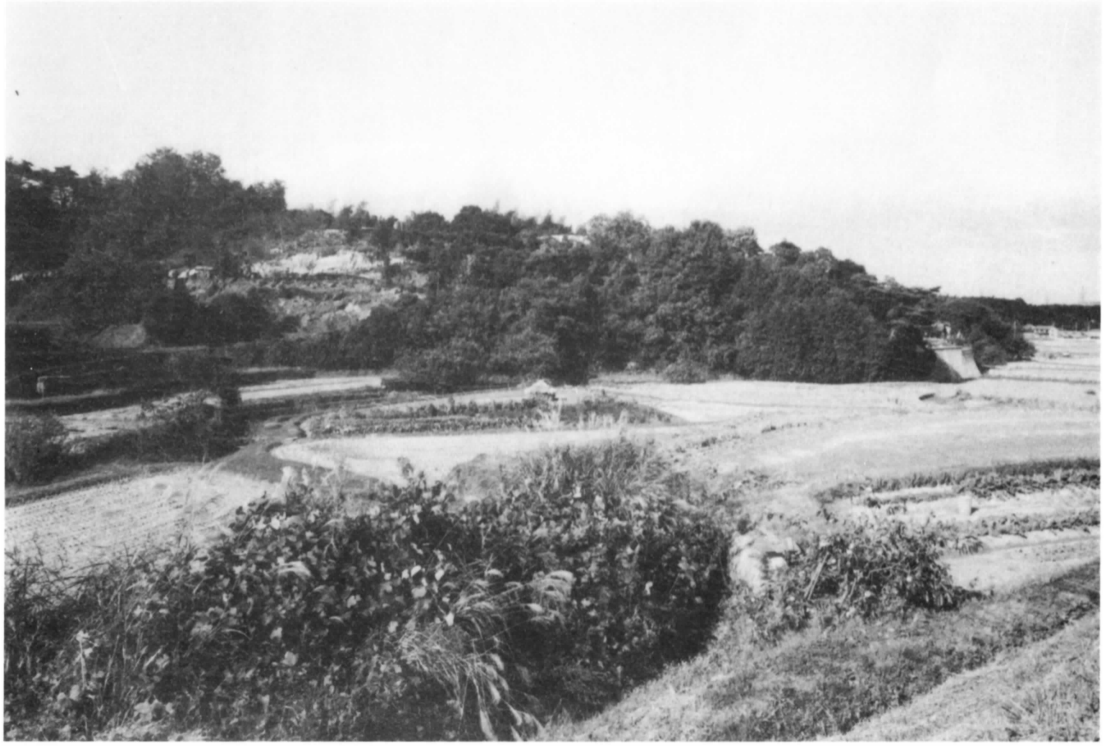
図版

図版1　遺跡周辺の航空写真

図版2　田原城址遠景

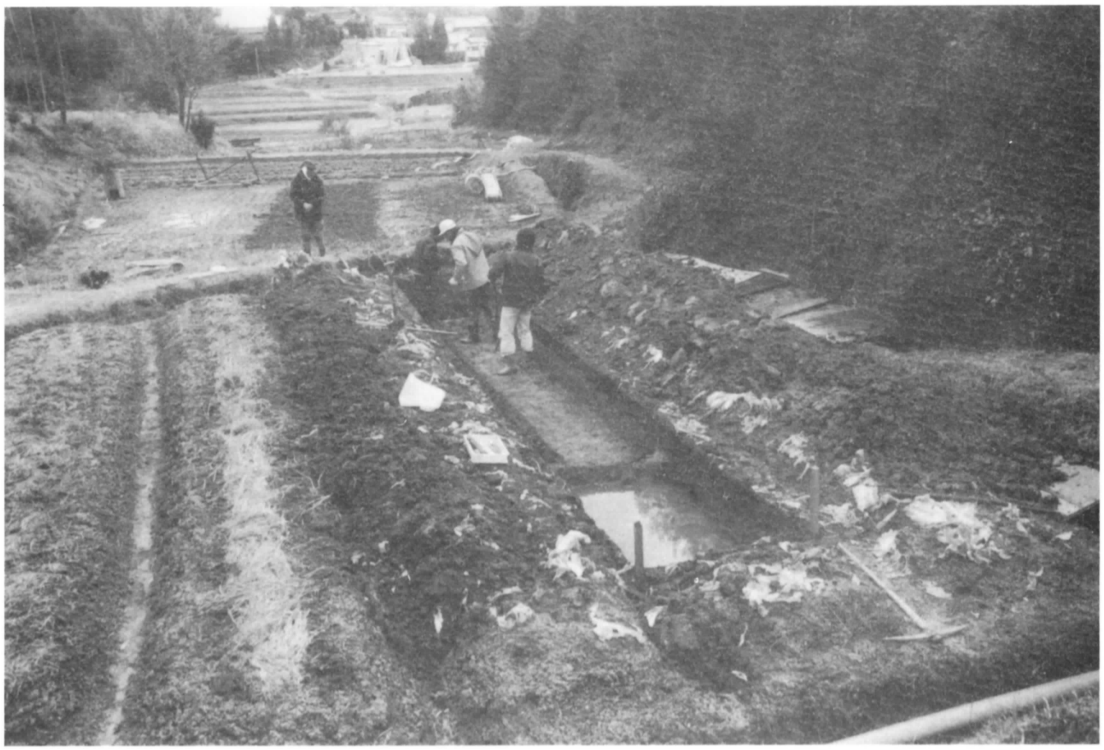
図版3　田原城址遠景





図版4　田原城址及び古堤街道・矢の石

図版5　田原城南濠内第2トレンチ・第3トレンチ

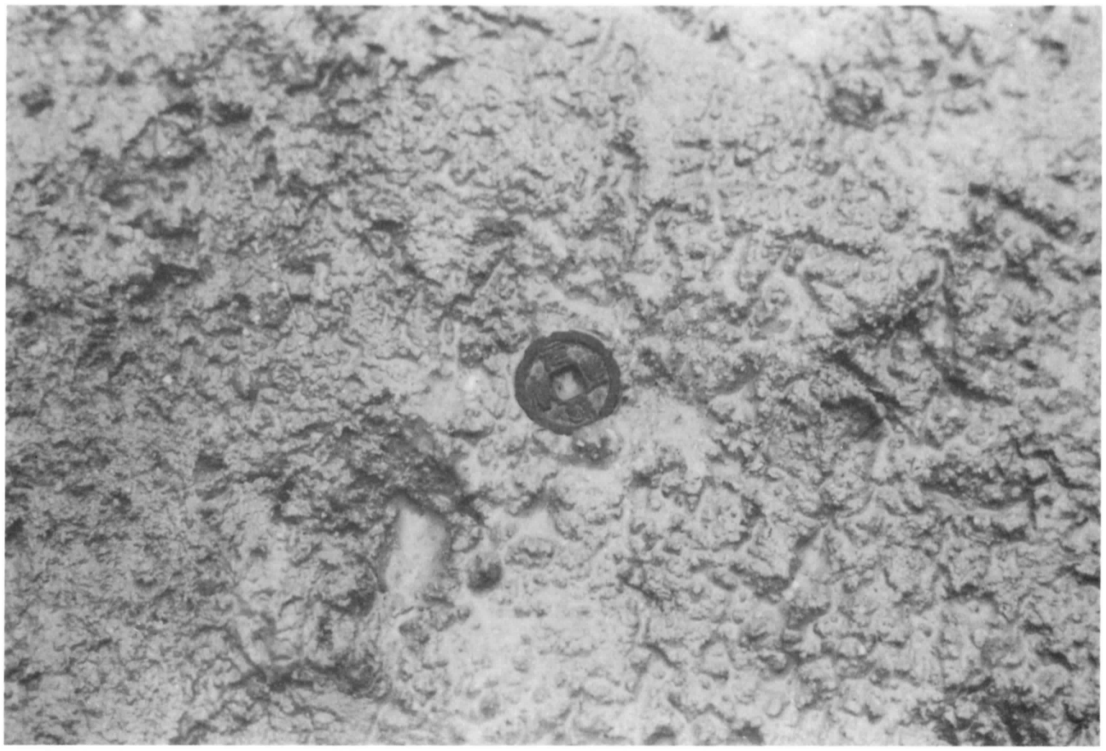


図版6　田原城南濠内第3トレンチ

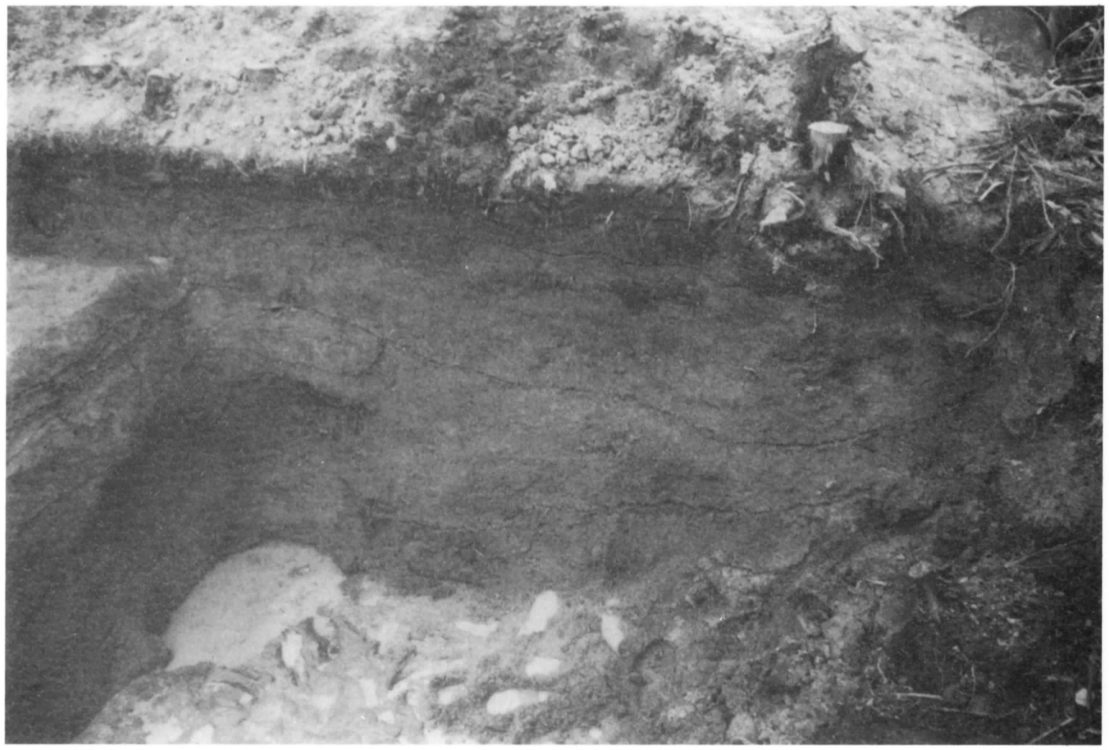
図版7　田原城北濠近景

図版8　田原城北濠内第4トレンチ

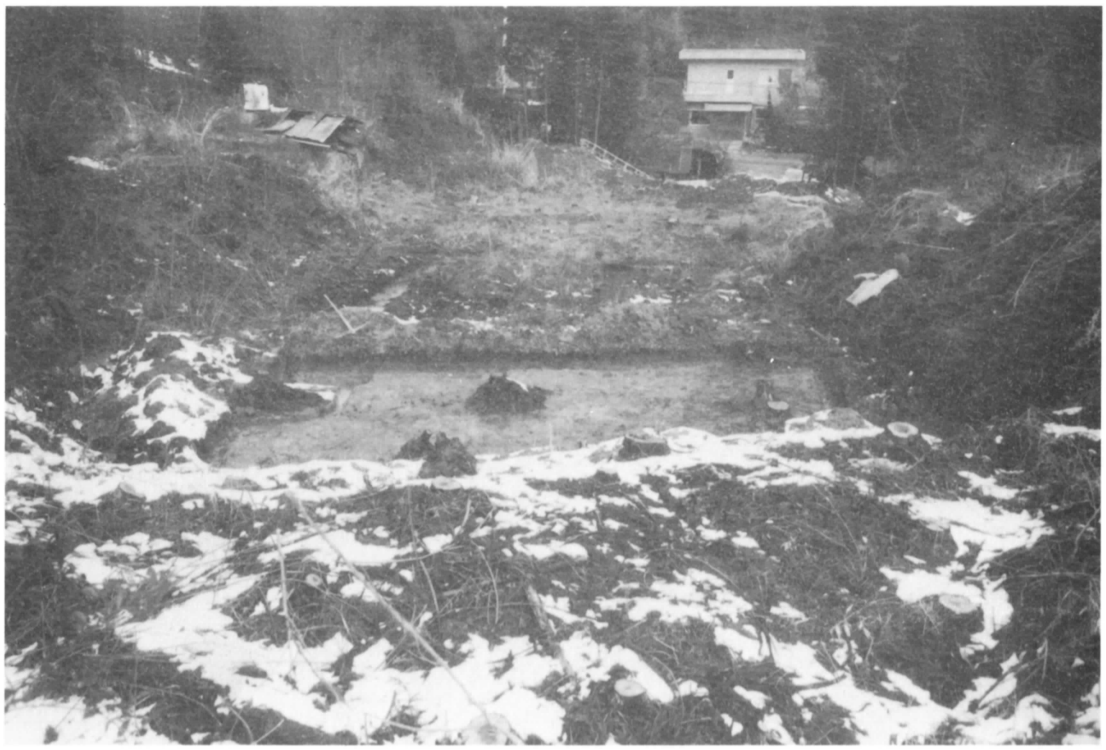
図版9　田原城北濠内第5トレンチ

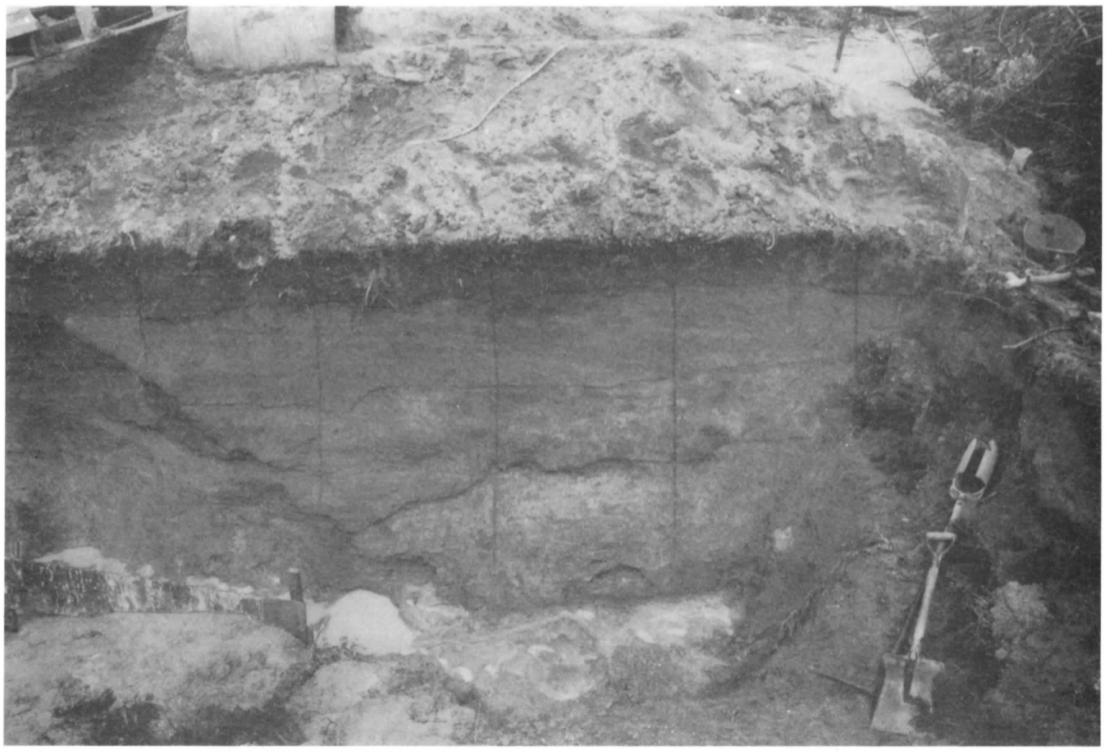


図版10　田原城北濠内第6トレンチ



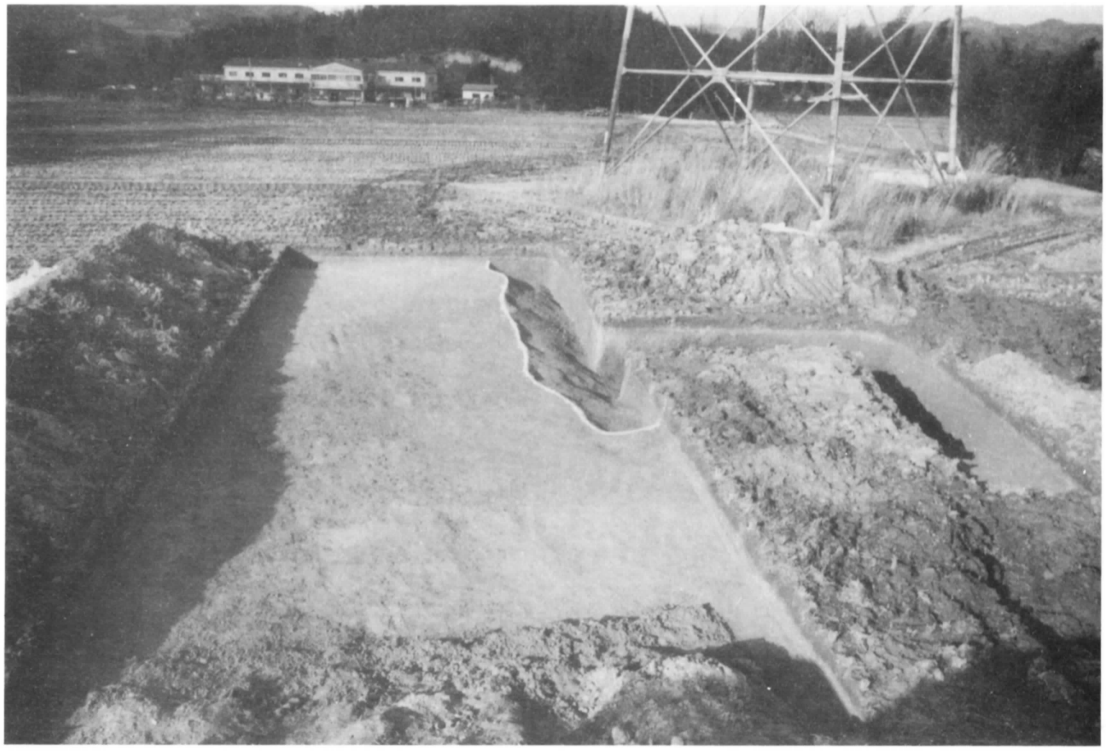
図版11　田原城北濠内第7トレンチ



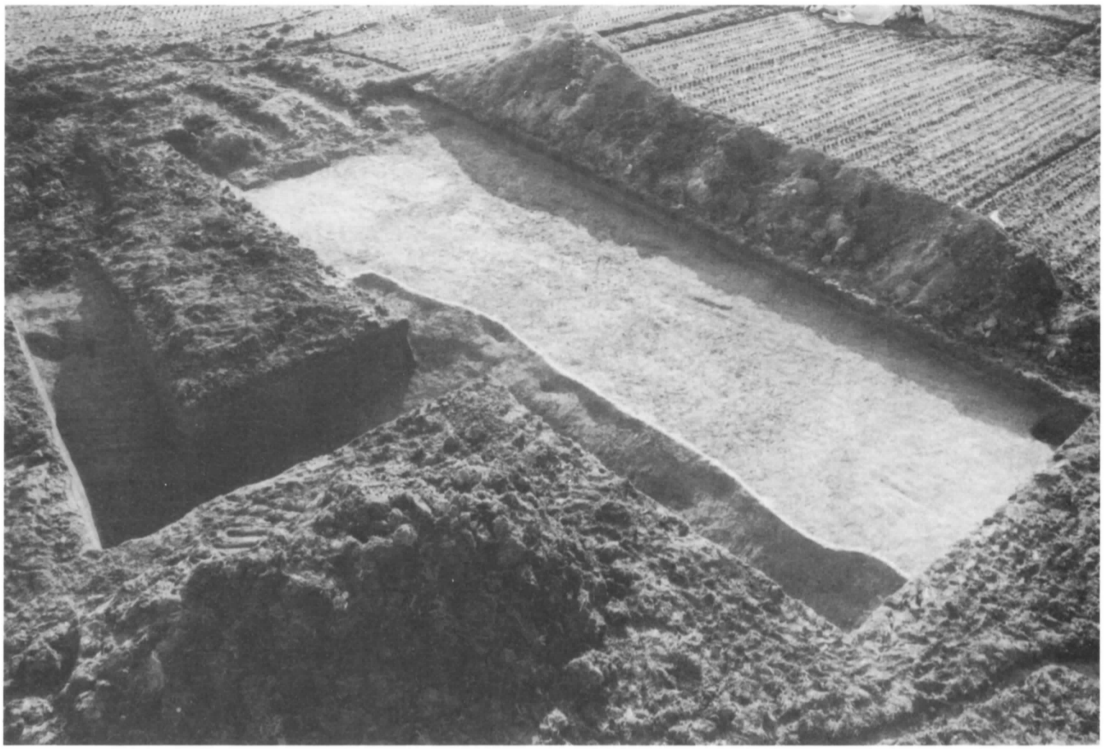


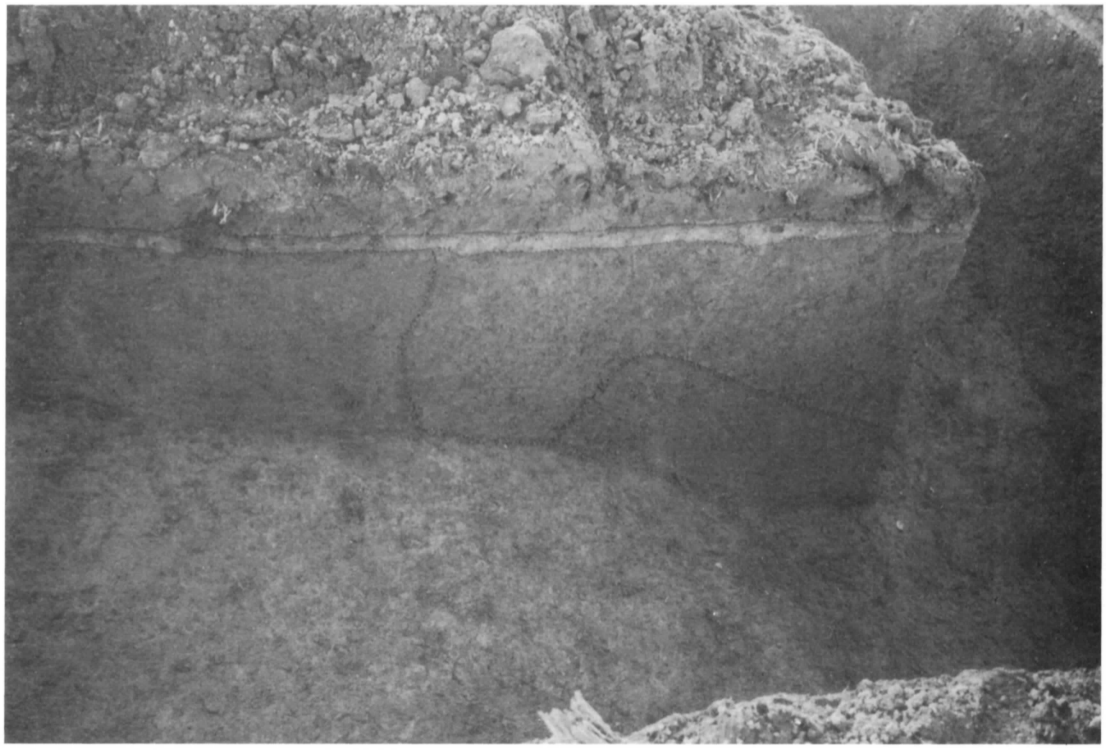
図版12　田原城第8トレンチ

図版13　田原遺跡調査地全景・第6トレンチ全景



図版14　第6トレンチ



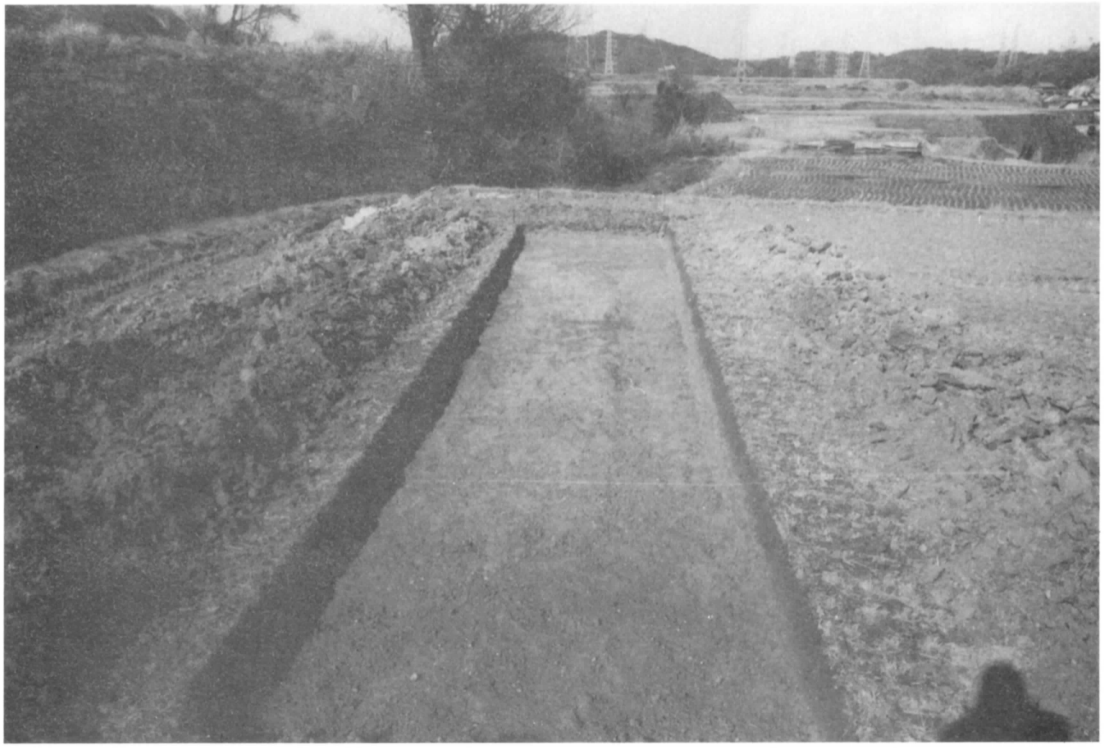


図版15　第8トレンチ全景

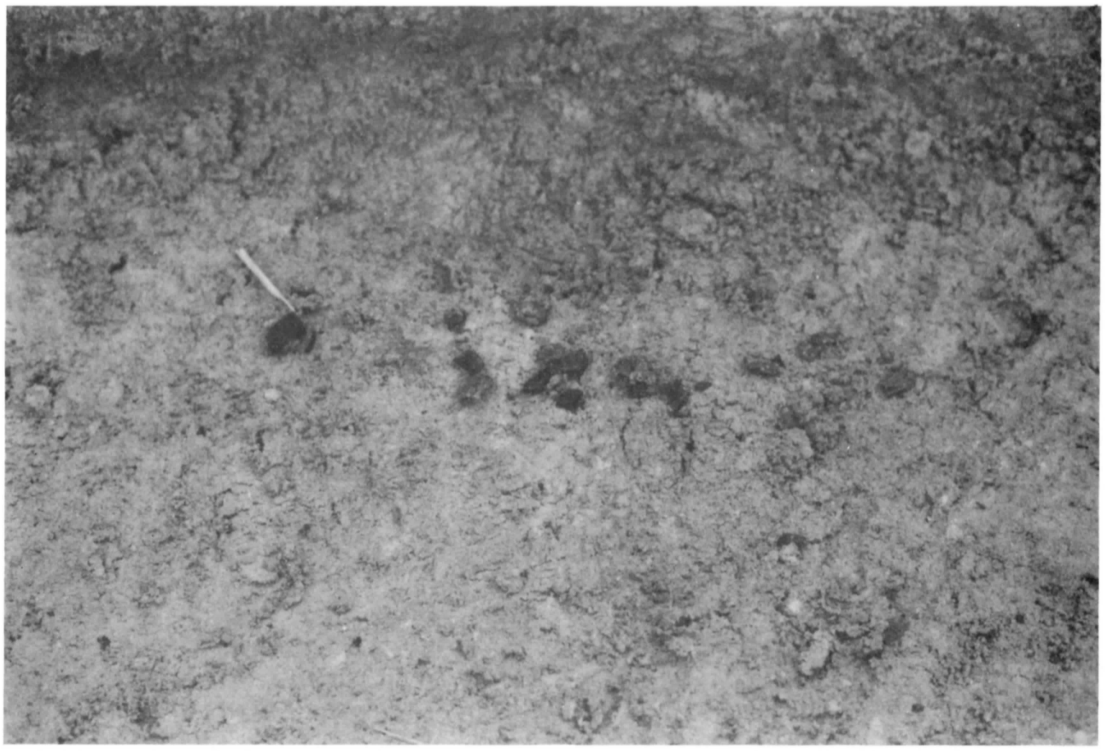
図版16　第9トレンチ全景・北壁断面

図版17　第11～第18トレンチ調査地全景

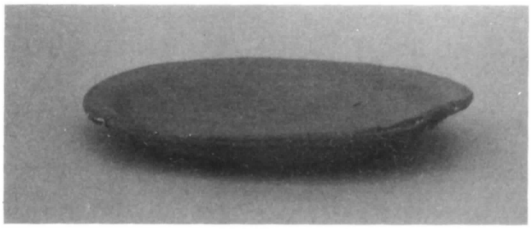
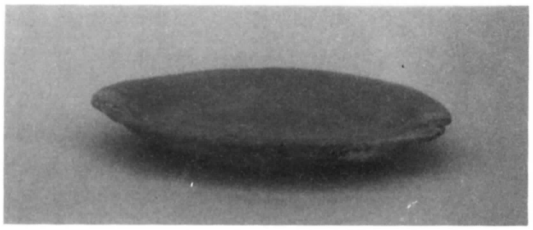
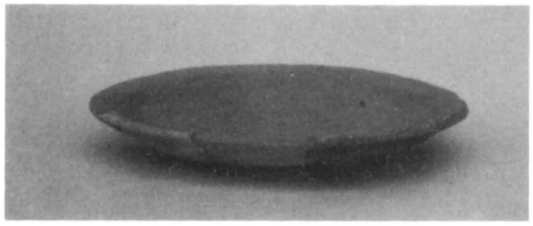
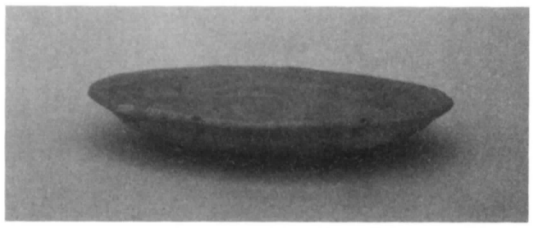
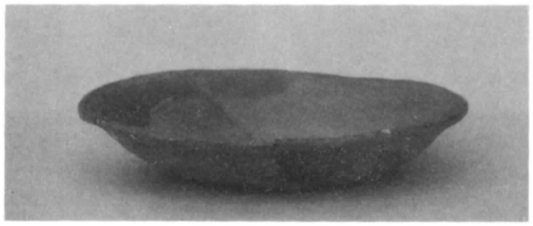
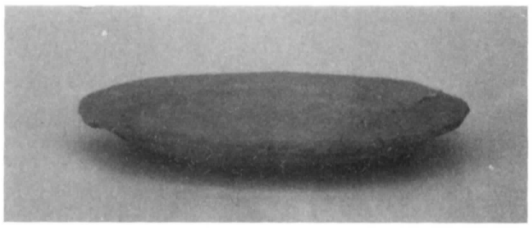
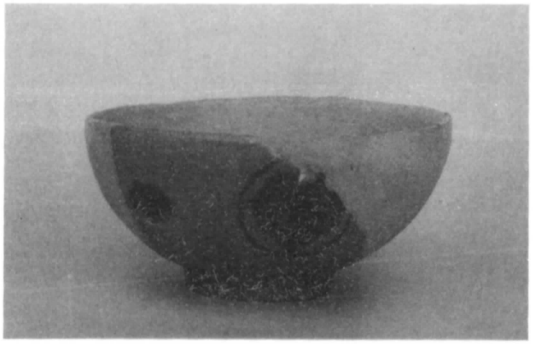
図版18　第12・第13トレンチ全景

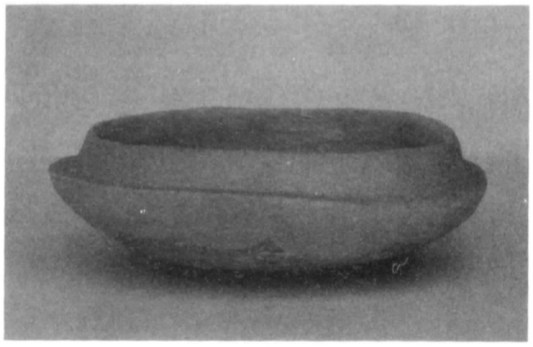


図版19　第13トレンチ南壁断面・炭化物出土状況

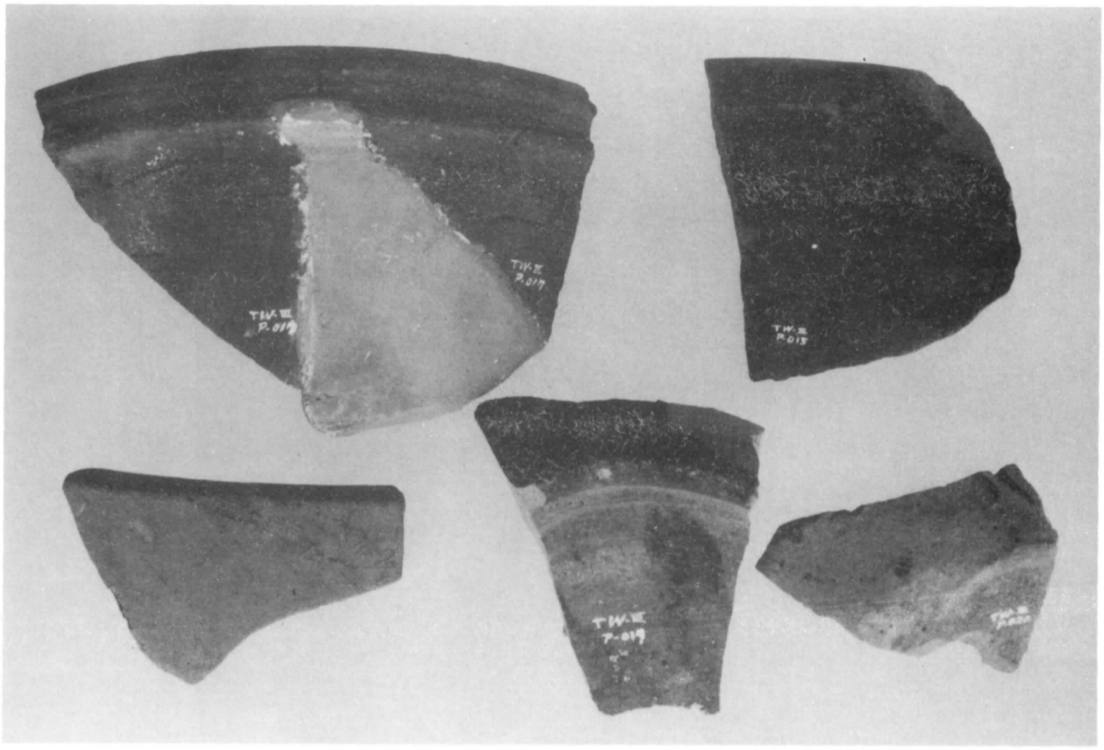


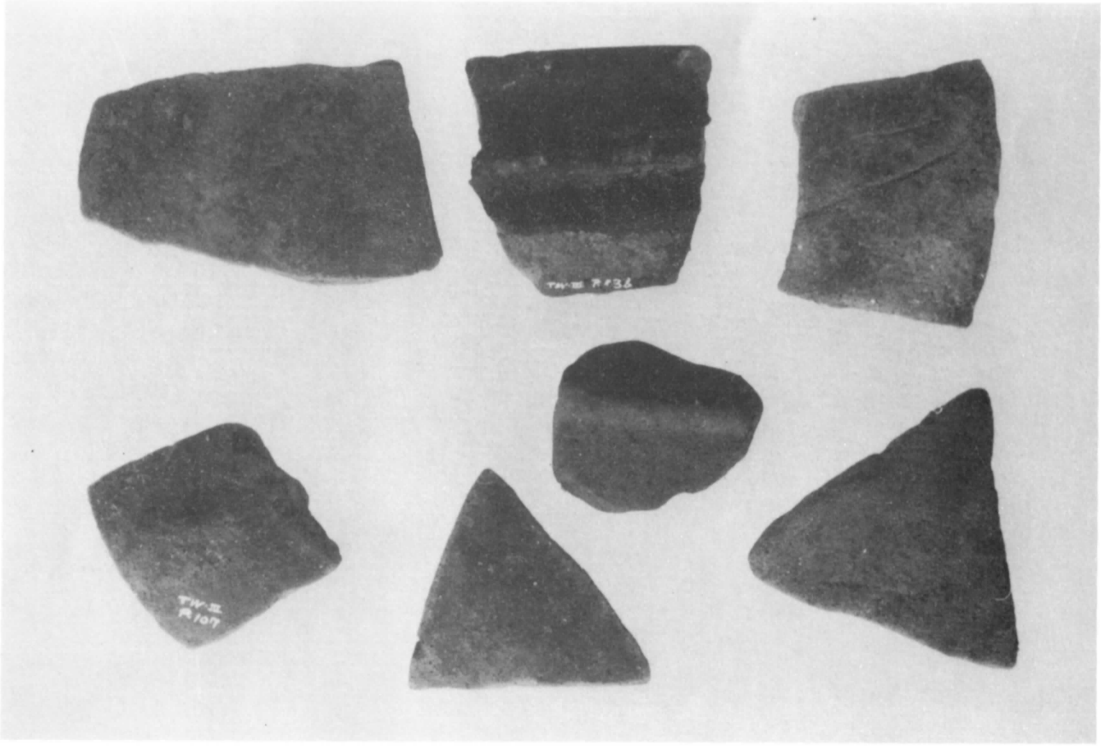
図版20　遺物写真・土器Ⅰ

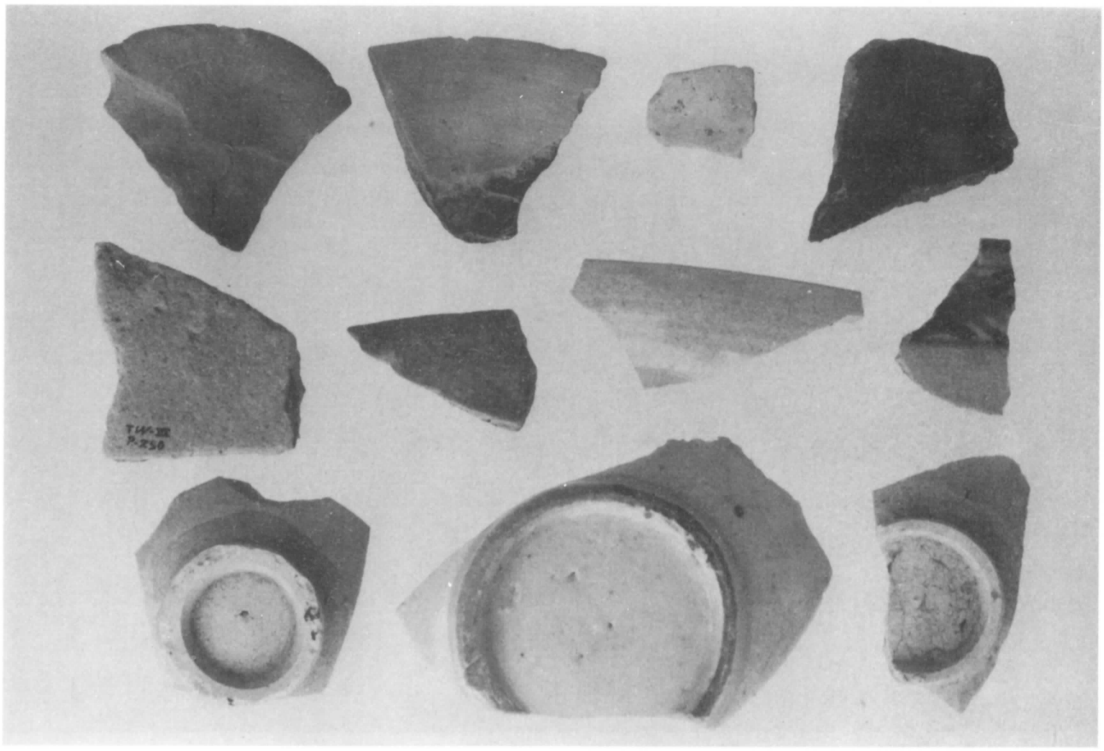


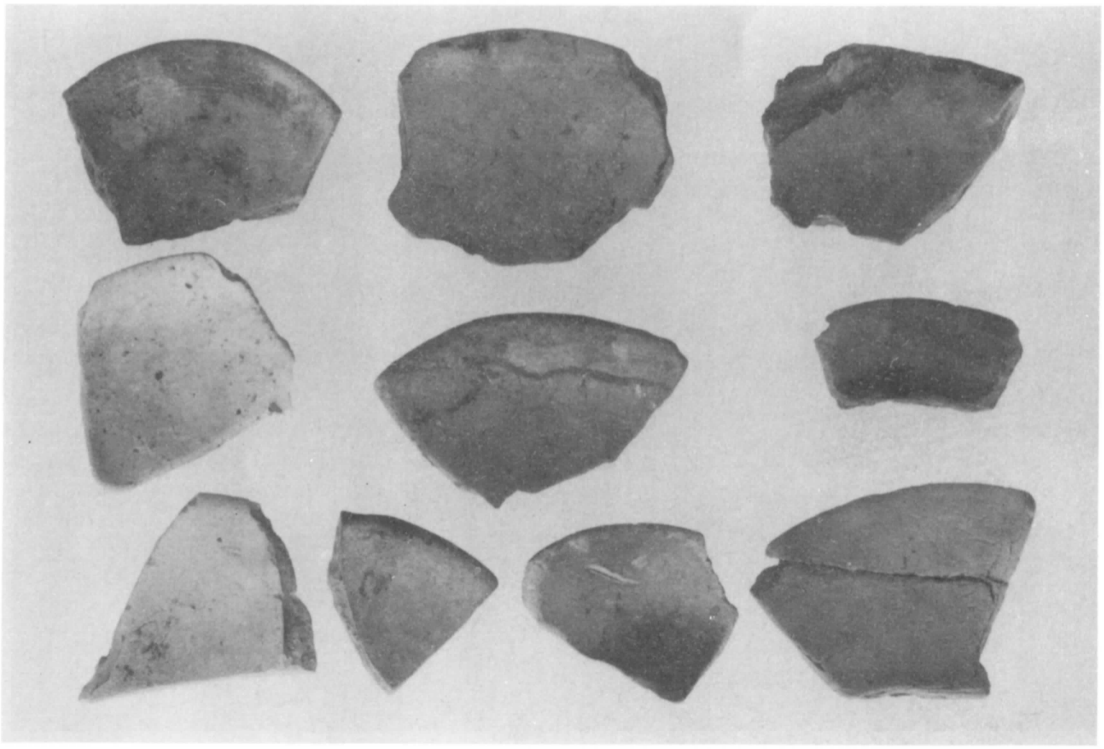
図版21　遺物写真・土器Ⅱ



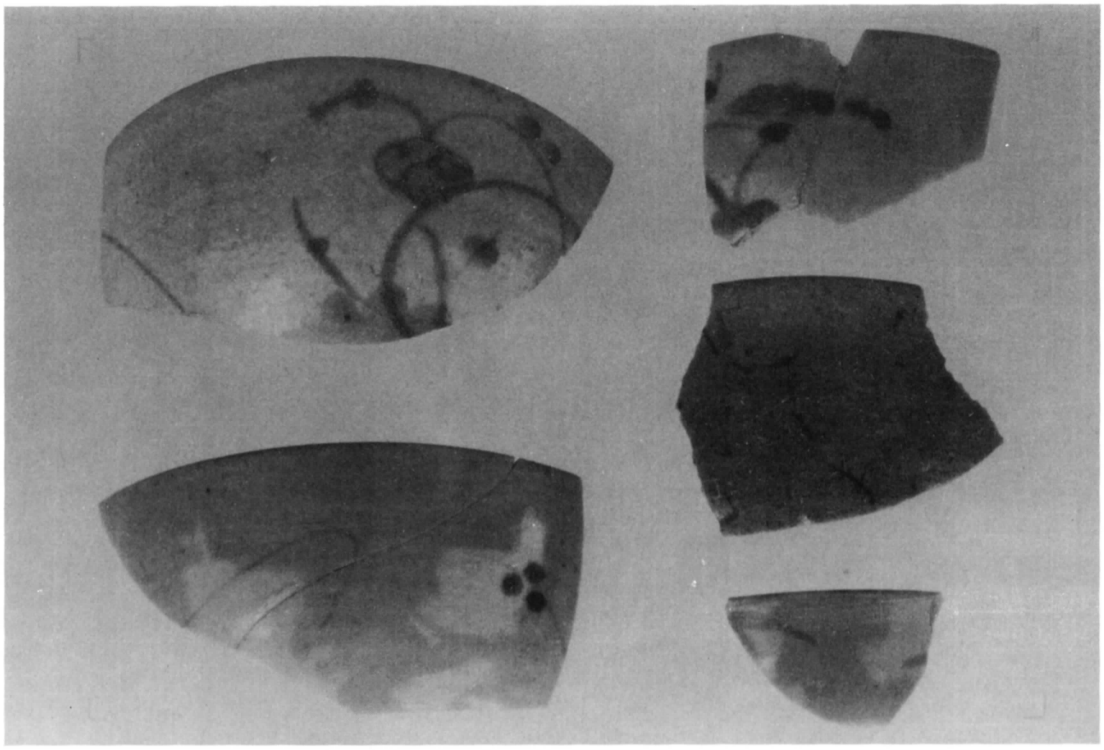


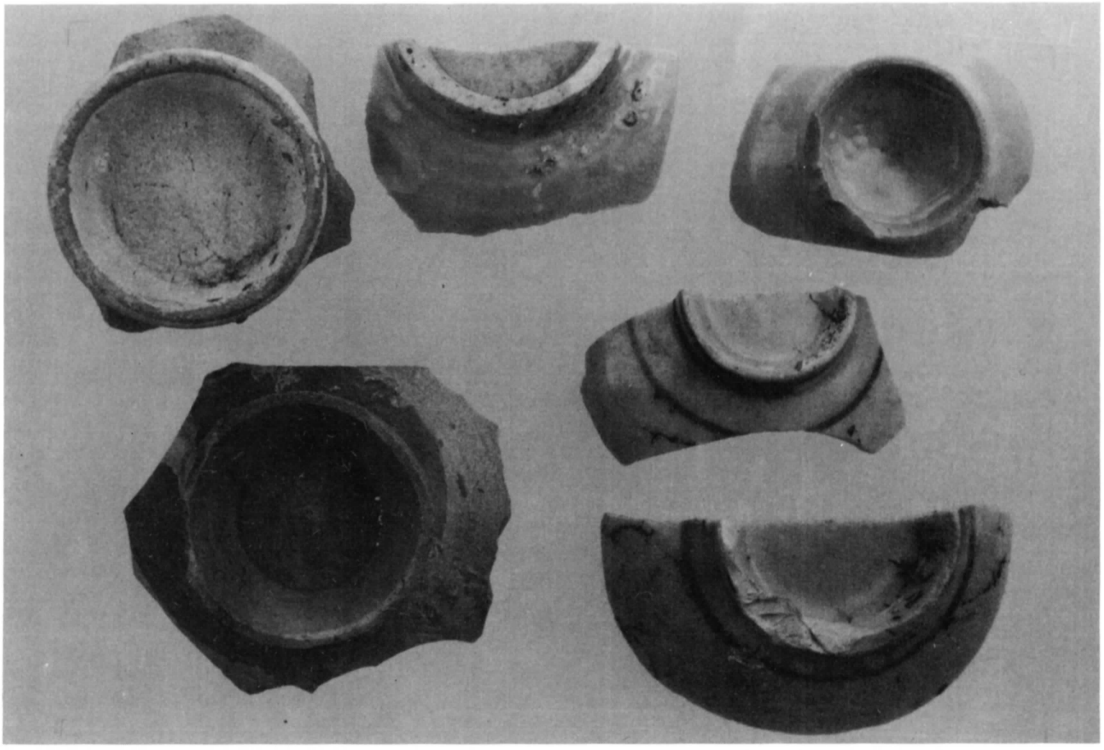
図版22　遺物写真・土器Ⅲ



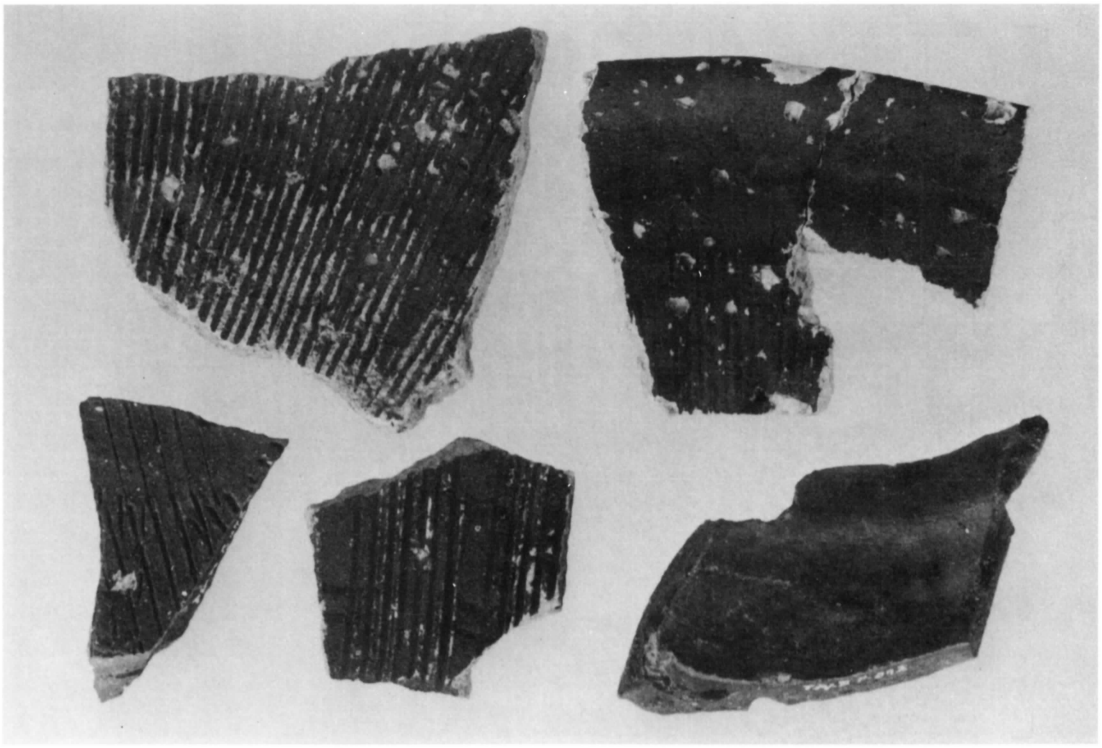


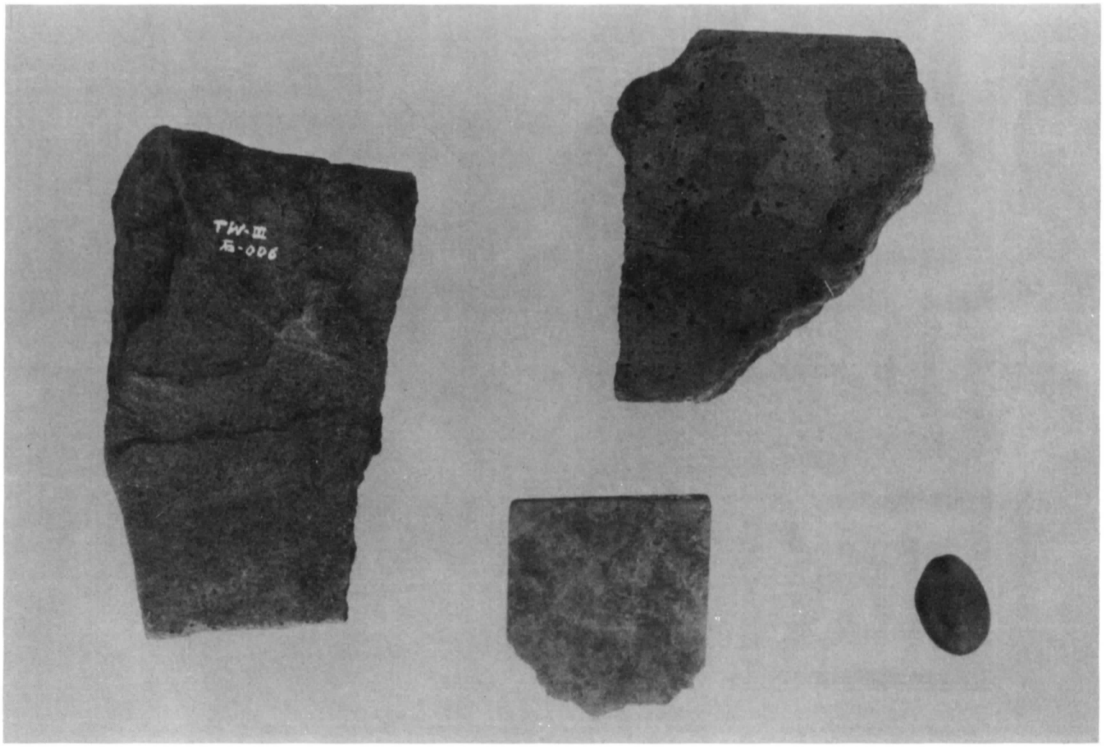
図版23　遺物写真・土器Ⅳ



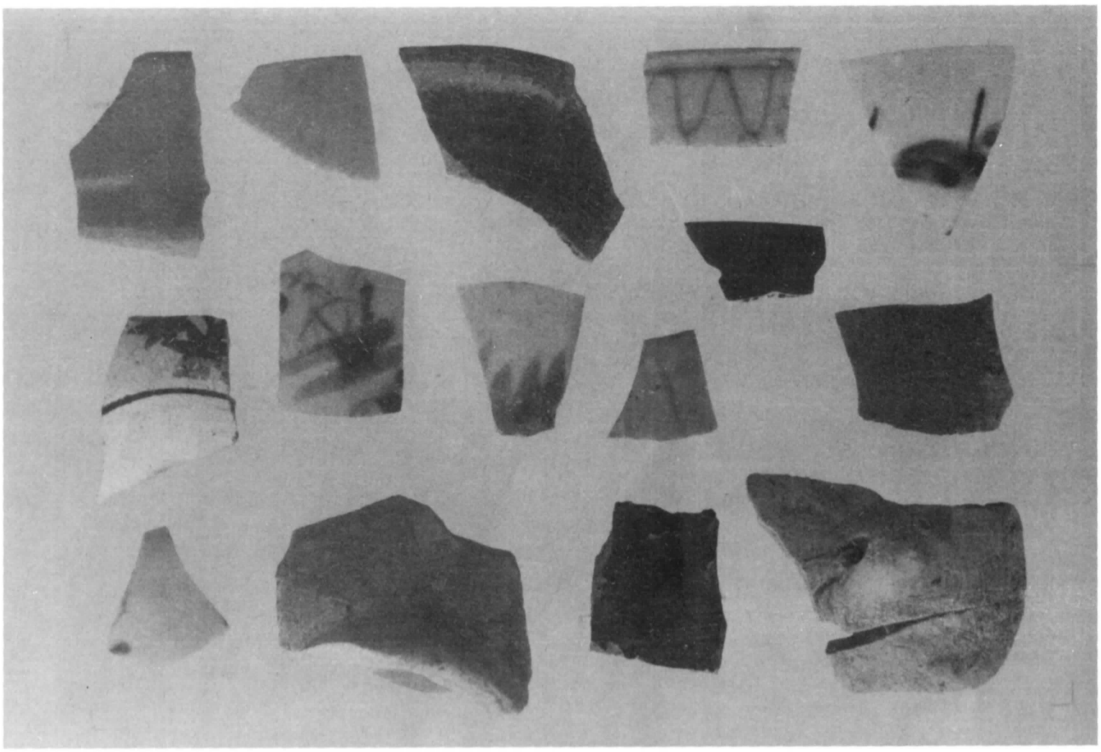


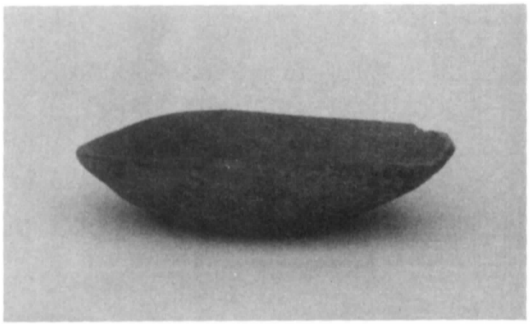
図版24　遺物写真・土器Ⅴ・石器Ⅰ

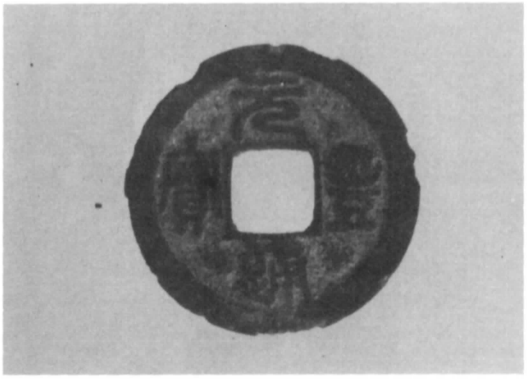


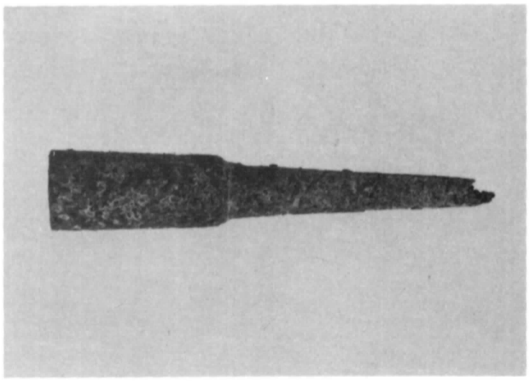


図版25　遺物写真・土器Ⅵ

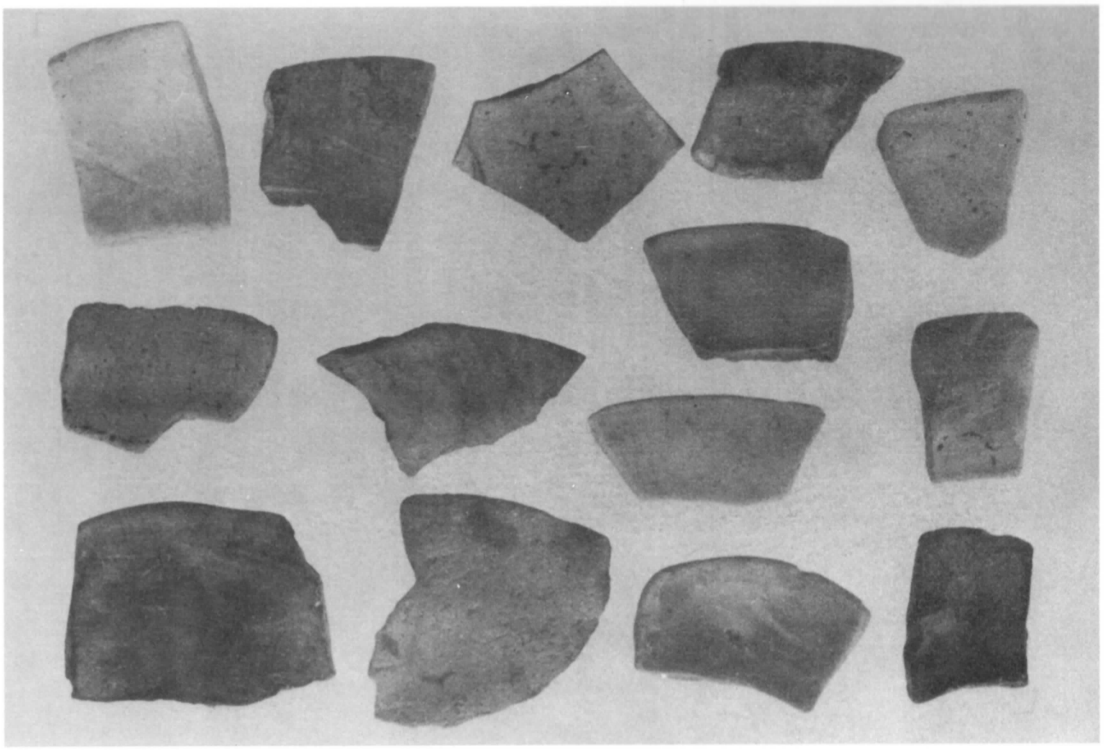


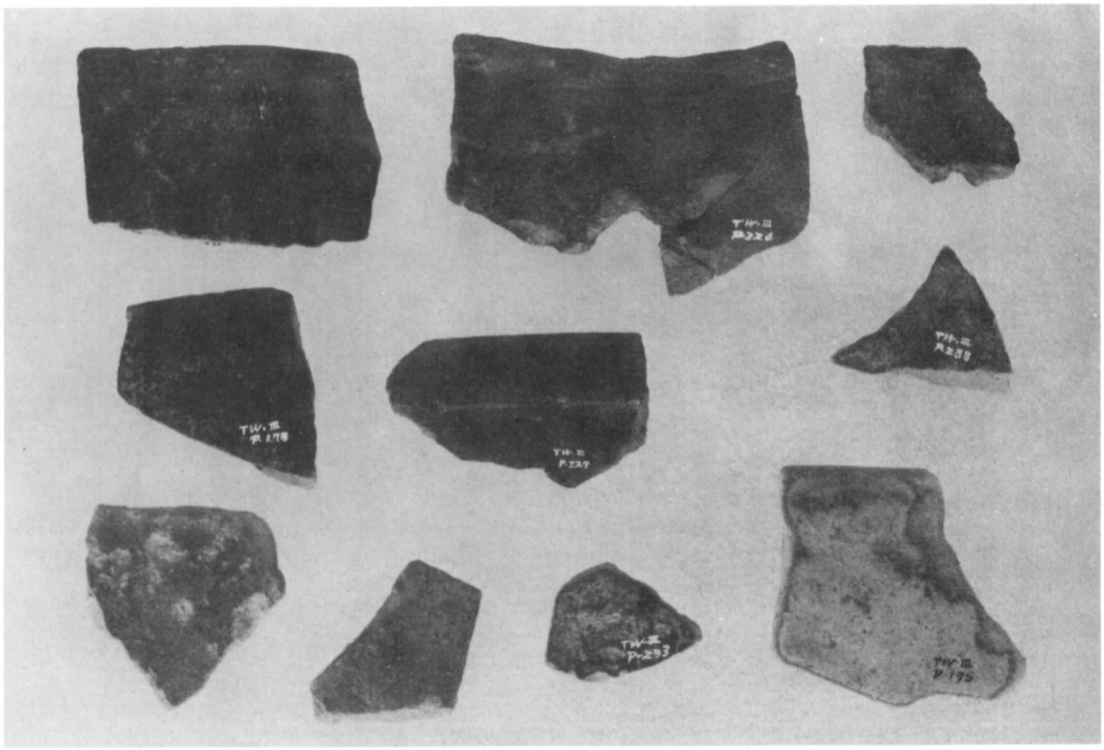






図版26　遺物写真・土器Ⅶ





田原城址・田原遺跡発掘調査概要・Ⅱ

昭和56年3月発行

編　集　四條畷市教育委員会

発　行　四條畷市教育委員会

四條畷市中野本町1－1

印　刷　田中耕株式会社